第１回

ニュータウン人・縁卓会議

報　告　書

平成１８年１０月２６日

特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン

はじめに（刊行のあいさつ）

平成１８年１０月２６日、「ニュータウン人・縁卓会議」を、６８名の多くの方々に出席して頂き、盛大に開催しました。さらに、当日の内容を報告書にして刊行できますことも、皆様のご協力のお陰と深く感謝しております。

大阪・千里ニュータウンから２つの活動団体、愛知・高蔵寺ニュータウンから１つの活動団体、茨城・筑波研究学園都市から１つの活動団体、東京・多摩ニュータウンからは、呼びかけ人である私どもが加わって「活動報告及び縁卓会議」を行い、行政・企業および大学関係者の方々に傍聴して頂くという形式で実施しました。この形式には、「地域活動は、住民が主役」で、「行政・企業および大学関係者が、応援団」であって欲しいという願いを込めました。果たして結果は、いかがだったでしょうか、出席された皆様のご評価をお願いします。

「少子・高齢化に、団塊の世代が大量退職を迎える時代」の社会問題が、局所的に集中発生するのが「ニュータウン問題」です。この社会課題に立ち向かうためには、行政だけでも、企業だけでも、市民だけでもなく、今回の会議のように、NPO法人がコーディネーター（つなぎ役）として「行政セクター・企業セクター・市民セクター」のすべてが包括的協働を行うところに、不可能を可能にする解決策が見えてくるのではないでしょうか。

この度の会議は、初めてでしたので「挨拶と自己紹介」が出来た程度でしたが、上記の社会課題解決法を用いた意味で「歴史的な会議」だったのではないでしょうか。
第２回目の縁卓会議は大阪・千里ニュータウンで２００７年秋に開催されることが決定しました。年１回の会議が一里塚となって、この社会課題解決法が進化を遂げていくことを願っています。

特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョンは、どこまでも主体者として、懸命に実践して「実験証明」をやり遂げて参る所存です。

平成１８年１２月吉日
特定非営利活動法人　エヌピーオー・フュージョン
理事長　富永一夫

目　　次

● はじめに（刊行のあいさつ）…… 1
● 目次 …… 2
● 司会挨拶 …… 6
妻野　海郎（特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン　縁卓会議事務局）
● 主催者挨拶 ……7
富永　一夫（特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン　理事長）

● 千里ニュータウンから活動報告―① ……9
特定非営利活動法人　千里すまいを助けたい！　代表理事　片岡　誠
＜千里ニュータウンは＞……9
＜千里ニュータウンの立地＞……9
＜千里ニュータウンの現状＞…… 10
＜公的住宅地の再開発＞…… 10
＜分譲戸建て地域はどうなるか＞…… 11
＜すまいを助けたい！直したい事業・守りたい事業・住み替えたい事業＞…… 12
＜運営と将来の展望＞…… 15

● 千里ニュータウンから活動報告―② …… 17
ひがしまち街角広場運営委員会　委員長　赤井　直
＜ひがしまち街角広場オープンまで＞…… 17
＜社会実験の様子と普段の街角広場＞…… 18
＜街角広場から生まれたもの-１周年から４周年まで＞ …… 20
＜街角広場移転＞…… 21
＜街角５周年パーティ＞…… 22

● 高蔵寺ニュータウンから活動報告 …… 25
春日井市コミュニティ推進連絡協議会　会長　吉田　光雄
＜春日井市・高蔵寺ニュータウンの概要と特徴＞…… 25
＜少子・高齢化の進展＞ …… 26
＜ニュータウンの循環バス＞…… 27
＜コミュニティと地区社会福祉協議会＞…… 28
＜ちょいボラの勧め＞…… 30

● 筑波研究学園都市から活動報告 …… 31
特定非営利活動法人　つくばアーバンガーデニング　事務局長　井口　百合香
＜筑波研究学園都市の開発＞…… 31
＜つくばアーバンガーデニングの誕生とおいたち＞…… 32
＜つくばアーバンガーデニングの３つの部会と活動＞…… 33
＜つくばアーバンガーデニングの花景色＞…… 35
＜つくば発「新田園都市・なかこん」のまちづくり＞…… 37

● 多摩ニュータウンから活動報告と各ニュータウン人との意見交換…… 39
特定非営利活動法人　エヌピーオー・フュージョン　理事長　富永　一夫
＜課題１：自分の老後の対策＞…… 39
＜課題２：コミュニティ再生＞…… 40
＜課題３：既存団地の管理と修理＞…… 43
＜課題４：自由に住宅を創る＞…… 45
＜課題５：高速インターネットの利用＞…… 48
＜課題６：地域活動支援＞…… 50
＜課題７：住替え支援＞…… 50
＜課題８：暮らしの支援＞…… 55
＜課題９：豊かに暮らす＞…… 56

● １０月２７日（縁卓会議終了の翌日）多摩ニュータウン見学顛末記…… 59
● 第１回「ニュータウン人・縁卓会議」配布資料一覧 …… 60
● 第１回「ニュータウン人・縁卓会議」報告者と団体紹介 …… 61
● 第１回「ニュータウン人・縁卓会議」写真集 …… 62
● 第１回「ニュータウン人・縁卓会議」収支実績報告 …… 63

第１回「ニュータウン人・縁卓会議」

主催　特定非営利活動法人　エヌピーオー・フュージョン

協力　国土交通省　財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

平成１８年１０月２６日（木）13:00～17:00
京王プラザホテル多摩　「たまつばき」（４階ホール）

● 司会挨拶　妻野　海郎

（特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン　縁卓会議事務局）

【妻野】　　私は、きょうの催しの事務局を預かっております、地元のＮＰＯ法人エヌピーオー・フュージョン（以下「ＮＦ」と略す）、妻野と申します。本日は、事務局と進行役を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

きょうは大変多くお集まりいただいて、心から感謝を申し上げます。ご案内のとおり、会議はこの真ん中に「縁卓」があります。全国のニュータウンから、４カ所、それぞれのニュータウンに住んで、そこで何らかの活動をやっている方にお集まりいただいての第１回目の会議でございます。つまり「縁卓」をかこみ、ニュータウンの縁（えにし）で集まった者同志が話し合い､それを周りにいらっしゃる方々に傍聴していただくという形です。真ん中の「縁卓」で進む会議の状況を傍聴していただいて、アピールや、問題点の提起・指摘などをおくみ取りいただけたらありがたいと、思っているわけであります。

何せＮＰＯというのはお金がありませんで、貧乏所帯でやっております。傍聴で集まってくださった方々三十数人の方から､大金のお一人１万円という参加費をいただきました。大変ありがとうございました。お蔭様で、私ども、手弁当で会議をやらなくちゃと思っていたんですが、後で計算して収支報告をいたしますが、どうやら収支とんとんで開催することにこぎつけられそうです。感謝しています。

この会場は、多摩ニュータウンでは一番立派なホテルの大宴会場であります。なぜこんな立派なところでかといいますと、実は、地元の私どもＮＦで、３階の一室を借用し「暮らしと住まい相談センター」という暮らしの相談事業を始めております。自主事業であります。そんな訳で、ここを会場にしました。

会議の進め方でございますが、資料１頁目の進行表通りやりたいと思っています。そして、４時から、１時間ばかり立食パーティーを用意してあります。名刺交換やら情報交換やらやっていただいたら大変ありがたいと思っております。

それから、資料のご説明をしておきます。お手元の資料でありますけれども、後々、資料としてご活用いただければ大変ありがたいと思っております。それでは、私ども主催者

から最初にごあいさつ申し上げて、縁卓会議に入らせていただくことにいたします。

富永一夫理事長、よろしくお願いいたします。

● 主催者挨拶　富永　一夫

（特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン　理事長）

【富永】　　恐れ入ります。天気もよかったので一安心しております。遠方からおいでになる方には、きのうだったら新幹線がおくれたりして大変だったなというような思いも持ちながら、開催にこぎつけることができました。ありがとうございます。主催者を代表しまして、あいさつを一言させていただきます。

この会、きっかけとしては、２００５年７月に国土交通省住宅局の担当の方とお会いする場面がありまして、今、事務局のほうからも説明がありましたように、ここの３階に「暮らしと住まい相談センター」というのを開設させていただくことになりました。その当初から、どうやったらこの多摩ニュータウン問題を解決していけるんだろうかということで悩みに悩んでまいりました。２００６年４月２日に開設をいたしまして、これでほぼ７カ月が過ぎたわけですが、どうも多摩ニュータウンだけでは、いろんな問題に対しての解決策が出てくる知恵も限られているのではなかろうか。それと、国土交通省から支援金をいただいてこういう事業を開始いたしましたので、いち早く、民間は民間で、ＮＰＯはＮＰＯでというふうに水平展開することがよろしいであろうということで、たまたまご縁のありました４団体の方々に来ていただきました。ですから、円卓を少々もじって、円い円ではなくて、縁（えにし）の縁ということで、会議を持たせていただきました。

今日がまず第１回目でありますので、果たしてどうなるのか、私もハラハラ、ドキドキでございます。とにかく挨拶がわりに、まず人と人とが出会って活動報告をやることから始めようということです。今日４時までの会議で、皆さん傍聴席のほうからも議論に参加していただきながら、何か今後につながるようなテーマが出されるなり、この会がつながっていければいいなと思っています。何よりも皆さんのご支援のたまもので、今日こうやってできることになって、ほんとうに自分としても感無量であります。サラリーマンの職

を辞してこんなことに情熱を傾けてまいったわけですから、資料冒頭のあいさつの末尾のところに書かせていただきましたけれど、今日この日、「小さな歴史」が動いたというような思いでおります。よろしくお願いいたします。

それでは、始めさせていただきます。(拍手)

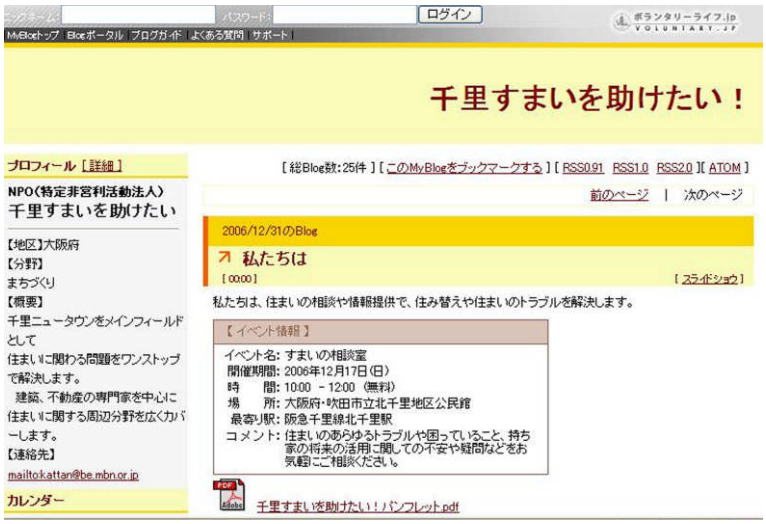
【妻野】　　それでは、早速会議を始めていただきます。会議の進行は、地元で、主催者でもあります富永さんに進行をやっていただきながら、コーヒーブレイクの後、いろんな報告、問題提起など出たことについて、傍聴の方からもぜひ発言をいただきたいです。質問、あるいは意見でも結構です。よろしくお願いします。

富永さん、お願いします。

【富永】　　主催団体ということで議事進行をさせていただきます。

それでは、早速始めたいと思います。

まず、千里ニュータウン人からということで、「特定非営利活動法人千里すまいを助けたい！」の代表理事をなさっておられます片岡さんから発表していただきます。



http://voluntary.jp/sumai/

●千里ニュータウンから活動報告―①

特定非営利活動法人　千里すまいを助けたい！ 代表理事　片岡　誠

＜千里ニュータウンは＞

【片岡】　　一番手で、大変たくさんの方がお見えなので非常に緊張しております。私、千里ニュータウンから参りましたＮＰＯ法人「千里すまいを助けたい！」の代表をしております片岡と申します。

千里ニュータウンということで、ふだんから多摩と比較されることが本当に多いです。千里ニュータウンはご存じのとおり大阪にありまして、日本で最初のニュータウンということで開発されたわけです。その辺のお話、少しだけさせていただいて、私たちの活動のお話をさせていただこうと思っております。

千里ニュータウンは、４４年前に大阪府が主体で開発が始まっております。これは、高度成長期、大阪に非常に人口が集中しました。その人口集中したものを分散するためという理由があったのでしょう。大阪府の北部に開発面積としては１，１６０ヘクタール、吹田市と豊中市の行政区画２つにまたがっています。計画人口１５万でできておりますので、多摩と比べても遜色はないと思いますが、当時としては非常に莫大な人口を集めようというニュータウンでございました。

＜千里ニュータウンの立地＞

位置ですけれども、大阪の中心がＪＲの大阪駅で、新大阪は少し北にあります。それをずっと北に行きますと千里ニュータウンがございます。電車で大体１５分ぐらいで千里中央という千里の中心部分に至ります。車でも、込んでいると１時間かかりますけど、普通ですと１５分～２０分ぐらいで到着します。ですから、非常に立地のいいところにできたニュータウンと言えると思います。千里ニュー

タウン自体は１２の住区に分けられております。この赤で囲ってあります部分が千里ニュータウンで、クラスターというような形で分離開発をされておりません。一体開発されておりますので、私も今日初めて多摩に参ったんですが、だいぶ多摩とは様子が違います。多摩は緑の中に１つの団地の集合体が幾つか点在していると見受けられたんですけれども、千里の場合はそうではありません。平面全体がニュータウンとして開発されているという点が違うのかなと、個人的に思った次第です。

＜千里ニュータウンの現状＞

人口ピークが１９７５年にあったんですが、現在はそれから比べまして全体としては非常に衰退しております。これはニュータウンの先行き、どちらでも同じようなことが言えるんだと思いますけれども、初めてできたニュータウンとしては一番最初にこういう目に遭っていると。計画人口１５万に対して、現状９万人です。最大ピークで１３万人入りましたので、７割に減少しました。際立って異常さが見えるのが小学生の数です。ピークから比べますと３割に減っております。ですから、小学校も大概が１学年１クラス、多くても２クラスという状態になっております。高齢化率、これは平均しまして２４％ですが、地域によっては４０％を超えております。ということは、お二人に一人は高齢者といった街になってしまっております。

＜公的住宅地の再開発＞

そこで、今現在、千里ニュータウンというのは、公的な賃貸住宅、多摩でしたら都営住宅であるとか旧公団の住宅というところは、順番に建てかえにかかってきております。これから１０年間で公的な賃貸住宅に関してはほぼ建てかえという形で進められております。千里ニュータウンには、公的な賃貸住宅以外の民間の賃貸住宅は基本的にありません。賃貸住宅はすべて公的住宅です。現状の賃貸住宅の数は変わりませんけれども、建てかえによってできる余剰地をすべて民間に売却しようという予定になっておるようです。そうすると民間の分譲マンションができます。これは私の単純な計算だと思ってお聞きいただきたいんですが、行政の方に申し上げますと、「ちょっとそれは多過ぎるよ」と言われて怒られるんですが、多分６万人が増えるだろう。そうすると、現在９万人ですから、計画人口の１５万人に達する、もしくは超えてしまうおそれがあるという大幅な増加が見込まれます。しかも、分譲マンションを買われる方というのは、３０代、４０代、特に３０代が最

近多いですかね。若い方が多くなりますので、千里ニュータウンが４４年前にできたときと同じように、一定の世代がどっとまた千里に入ってくることになりまして、非常にアンバランスな人口構成になります。なおかつ、高齢化率というのは、今、ほんとうに上がってきて大変だ、大変だと言っていますが、現状の２分の１ぐらいになるんじゃないかと思われます。千里ニュータウンは若者のまちだよと、ひょっとしたら言われるようになるかもしれないという大きな変革期に至っております。

＜分譲戸建て地域はどうなるか＞

千里ニュータウンには分譲住宅も６，０００戸ほどございます。多摩と同じように、それこそ１００坪、２００坪というような大きな敷地に建っている、邸宅に近いような住宅です。それは当然個人で持っていらっしゃいますから、その方々は、自分たちの経済原則でのみ動かれます。空き家にしていらっしゃる方、売

られて業者が買って、それを２つ、３つに分けて販売するというような形です。結構動きはあるんですけど、全体としてはまだ何か変わったなというほどのことはありません。でも、住んでいる方々は高齢化してきているわけですから、こういう地域は、高齢化率が４０％という数字になってくるんですね。そうすると、日々生活すること自体が大変になってくる。そこに住んでいること自体が問題になってくるので、私たちが何かの支援をしていかなければいけないだろうなと。公的な住宅は行政が支援してくれますけれども、個人で所有している戸建ての住宅地にまで、極端に言うと行政は何もしてくれません。何かできる立場の者というのは、私たちのような非営利の団体、もしくはボランティアの団体なんだろうなと思います。

お聞きしていますと、皆さん、千里ニュータウンにはずっと住んでいたいという希望をお持ちです。これは、多摩も多分同じだと思うんですね。開発当初から入られた方というのは、やはりそれだけ思いを持って入られてきて、長らくそこに住んでいらっしゃる。そうすると千里以外には出ていきたくない、多摩以外には出ていきたくないという意識が非常に強くなってくるのではないかと思います。ですから、千里の方もずっと住み続けたい

というのを第１の希望として持っていらっしゃいます。それ以外に、やはりどうしても住み続けられないからどこかに移る、もしくはニュータウンの中で、便利な住まいに移りたいという方もいらっしゃいます。その場合の世代交代も考えていかなければならない。

それとあと、住環境ですね。環境がいいからこそ、関西では千里ブランドという言われ方をしております。戸建ての住宅地に関しましては、特にブランドとして認識されているわけなんです。関西の場合、ブランドと言われているのは芦屋という高級住宅地があります。芦屋ブランドと言われたりしますが、それに次ぐぐらいのブランドがあるのかなと自負しております。そのような住宅地ですので、その環境は守っていく必要があるだろうと。二律背反する面はありますが、何がしかの支援をしていかないと、この分譲住宅地はどんどんどんどん衰退していって、それこそ誰も住まなくなり、空き家だらけになってしまいます。治安も悪くなって、それ以外の方々も不安だからどこか別に移ろうかということにもなりかねないのです。

＜すまいを助けたい！直したい事業・守りたい事業・住み替えたい事業＞

そこで、私たちは、住宅に特化した活動を今現在しております。後で街角広場の赤井さんから報告していただけると思うんですが、本来は、お互いの助け合い、生活の助け合いとか、別の内容の活動もあると思います。あれもこれもというのでは、なかなかいいものはできないと私たちは思っていまして、住まいに特化して活動を始めております。

まず、「直したい」ということですが、日々生活する中でどこかが壊れてしまったので、直したいけれど、どこに頼んだらいいかわからないとか、どういうふうに直したらいいかわからないという単純なことが高齢者の場合は多いです。そのあたりを私たちは、ワンストップで解決していくことを基本に考えております。

「見守り」というのは、高齢者の場合、必要になりますが、「見守り事業」は、基本的には福祉の方にやっていただきたいと思っています。私たちは、福祉ではなく、住宅のメンテナンスという面から見守りをやっていこうと思っています。見守りのきっかけが住宅のメンテナンスだとお考えいただいたらよろしいかと思います。

それから、最も目指しているところは「住み替え」です。高齢者の方が大きな２階建てのお宅に住んでいらっしゃって、２階はもう全然使っていないんだと。「どうしてですか」と聞きますと、「階段が上がれないんです」とおっしゃるんです。階段が上がれないので、仕方なく１階の一間、二間だけで日々の生活を送られている。それこそ１００坪、２００

坪の敷地の大きなお宅に住んでいらっしゃってそうなんです。それとか、庭が草ぼうぼうになってしまう。手入れができないんですね。そういうのを考えますと、ふだん、私たちが生活の中の細かい部分を直したいということで支援するのはさることながら、やっぱり住めなくなってくるタイミングというのが出てくるわけです。

その方々は、どういうふうにしたら自分が将来、２０年、３０年、楽しく楽に生活できるかということを考えられないわけですから、住み替えについていろんな情報を提供していく。しかも、その情報に基づいて具体的な手助けをすることが必要であろうなと考えています。

「直したい事業」というのは、当然、日々の基本的なものですね。コンセントが壊れたから直したいんだけど、電気屋さんが近所にないと。千里ニュータウンは、ニュータウンの中に電気屋さんというのは数えるほどしかないです。各住区と呼ばれています１つの区分に１つずつ小さな商店街がありますので､そこに電気屋さんがあればそれで事足りると。でも、そこになかなか頼めないようなことも出てきますから、そうすると、どこに頼んだらいいだろうかということで皆さん悩まれて、そのままほったらかしになってしまうということがあります。これはほかにも、水道であれ、家具の移動であれ、草取りであれ、いろいろあるわけです。私たちに相談していただいたら、何でも解決しましょう。住まいに関してはとにかく相談してもらったら何なりいたしますよという形で進めたいと思っています。

最近、悪徳リフォームという問題も出てきていまして、余計に住民の方々というのは不安がられて、今までチラシが入っているようなところでも、ちょっとこれは心配だなと、なかなか相談されないという傾向が見受けられます。安心して相談していただける窓口ということで、フュージョンさんもこちらの下の階でやられているような（「暮らしと住まい相談センター」）、気軽に安心して相談いただける窓口を常にあけておくということをやりたいと思っています。

「守りたい事業」は、住宅のメンテナンスに関して定期的な巡回をして見守りに貢献しようというやり方です。

「住み替えたい事業」、は、今戸建て住宅に住んでいらっしゃる方がもう住めなくなるからということで、駅前に千里のほうもマンションがぼちぼちできてきつつありますが、そちらのほうに移りたい。移ったら、今まで住んでいた住居というのは、売るか空き家のままにしておくかというケースになるわけです。それだけがほんとうの利用ではなくて、貸

していただくといいんじゃないかなと思っています。ニュータウンの中でも結構ですし、ニュータウンの外からニュータウンに住みたいという方はたくさんいらっしゃいますから、できれば若い方々に入ってきて住んでいただきたいと思っています。

ここで、ちょっと具体的なお話もしたいと思います。賃貸の場合、東京と比べますと、あ、そんなもんかと思われるかもしれないんですけれども、千里ニュータウンの一戸建ての家賃が、小さめのお宅で月２０万円から３０万円ぐらいです。一般の３ＬＤＫの新築のマンションで、駐車場まで入れて月１３～１４万円が大阪の水準です。ですから、１．５倍から２倍になります。それを若い方々に「借りてくださいよ」といっても借りてもらえるわけがないんです。皆さん、日々の生活が大変なわけですから。そうしたら、１３万、１４万というところまでできるだけ家賃が下がってくれれば借りていただける可能性があるわけですね。ついせんだって、関東のこの近くの電鉄系の不動産会社のほうで「定期借家を使って住み替えを」という記事を見たことがあります。私たちも定期借家を使って家賃を下げようと考えています。

定期借家というのは、期間を５年とか１０年とか区切りまして、その間だけ貸しますよという制度です。そういう制限を設けることで家賃を下げることができますので、２０万の家賃であれば、できるだけそれを１６万、１７万ぐらいに下げられればなと。それぐらいに下がるというのが市場の原理になっていますので、あと１万、場合によっては２万ぐらいちょっと多めに出していただければ、敷地１００坪ぐらいの戸建住宅に若い方々が住むことができるということで、非常に効果が出ると考えています。

単純にその中継ぎをするのは不動産会社の方にお任せする部分でありますから、我々としては仲介ということは考えていません。私たちが持ち主の方からお借りしようと思っています。持ち主の方にしますと、安心したところに貸したい、きちっと期限が来たら返してほしい。将来、自分の子供が戻ってくるかもしれない、自分がもう一度使えるかもしれないという希望を持っていらっしゃいます。私たちがお借りしたものを私たちが責任を持って管理しながら、若い世代の方にお貸しする。いわゆる又貸しです。そういう形で運用していきたいと考えています。あと、売られる方もいらっしゃいますから、その方々に関しては、不動産会社の方々が仲介される部分も多少あります。ダイレクトに買いたい方、売りたい方を結びつけていけるようなバンク形式、「空き家バンク」という言い方をされているところもありますが、そういうストックを持って動いていきたいなと思っています。

ここでちょっとご説明しておきたいのは、決して私たちはＮＰＯ法人だけで動いていく

ことは考えていません。やはり専門知識が不動産に関してはかなり要りますので、それぞれ専門の事業者の方々とタイアップ・提携しながら動いていくことを前提にしています。

ですから、何か修理・修繕が出てきましても、基本的に、できる部分はしたいと思いますが、できない部分が非常に多いですから、その部分については民間の事業者の方々と提携しながら、その方々に対して紹介させていただく。私たちは何をするかというと、紹介だけではないです。紹介だけだったら、これは紹介業になりますから、本来の趣旨から外れます。私たちは、サービスを受ける方の要望をきちっとお伝えする。工事が終われば工事が終わった後の検査もして、品質まで見させていただこうと思っています。それがＮＰＯ法人の使命と理解しております。

あと、不動産につきましても、やはり我々は手に負えない部分があります。情報が不足する部分があります。これは不動産会社の方々に実際に仲介をおやりいただくことを考えています。我々は一つの窓口として機能していきたいなという考えでございますので、決してけんかを売るわけではありません。その辺、ご理解いただきたいと思います。

＜運営と将来の展望＞

実際に活動をする中で、チラシ１枚配ったってこんな話は出てこないんです。非常に大きな財産を持っていらっしゃいますから、それについては相談会であるとか講演会を日々やりながらニーズを吸い上げていこうと考えております。

将来的には、住まいだけに特化するわけにはいかないですが、当面は、「直したい」、「守りたい」、「住み替えたい」というのを有機的に結合させて、お互いに相乗効果で問題を解決していきたいと考えています。将来的に、買い物代行とか物品の販売というのが絶対に出てくると思っています。これはほかのＮＰＯの方々とも協力してやっていきたいと考えております。

最後になりますが、「千里ニュータウン展　ひと・まち・くらし」を皆さんのお手元の資料ファイルにお入れしております。これは、平成１８年春に吹田市の市立博物館で行われました「千里ニュータウンを博物館に展示しよう」という企画でございまして、市民４４名が手弁当でやりました。吹田の博物館は、１年間の入館者が前年で大体１万７，０００人だったんです。この「千里ニュータウン展」は、４４日間で入館者が２万人を超え

ました。ということは、ニュータウンのパワーというものが示されたのかなと考えております。それから、これは火曜日にでき上がってほやほやで、ちょっと湯気が立っているので、お持ち帰りの際はお気をつけていただきたいのですが、私たちの事業のパンフレットをごらんください。

以上、簡単でございますが、これで終わらせていただきます。（拍手）

【富永】　ありがとうございました。ディスカッションする時間がなくなっちゃったんですけれども、そうはいっても、何かお聞きになりたいこととか、吉田さんや、赤井さん、井口さんのほうでありますか。

【吉田】　後でまとめて。

【富永】　はい、じゃあ、私ども多摩が始めた「暮らしと住まい相談センター」の事業とかなりダブる部分がありますので、私の質問等々も後回しにして議事を先に進めていきたいというふうに思います。

それでは、もうお一方の千里ニュータウン人であります赤井さんのほうからお願いいたします。

http://blog.livedoor.jp/machikado01/

● 千里ニュータウンから活動報告―②

ひがしまち街角広場運営委員会

委員長　赤井　直

＜ひがしまち街角広場オープンまで＞

なぜ「ひがしまち街角広場」ができたの？

平成12年、新千里東町地区では、少子高齢化が進む中で、人々がお互いに交流しながら、いきいきと暮らすことができる地域社会づくりを目指した、国の事業「歩いて暮らせるまちづくり構想事業」（全国20地区を対象）が実施されました。

その中では、地域の住民の方や商業者の方、行政や大学等とともにワークショップやアンケートが実施され、それらをもとに「７つの提案」と、「３つの社会実験」が提案されました。

平成13年度、「７つの提案」の１つ『近隣センターを生活サービスと交流の拠点にしよう！』及び「３つの社会実験」の１つ『近隣センターの変身（暫定利用）』に基づき、社会実験「住民組織による近隣センターの空き店舗の暫定利用」が行われました。

住民代表者の方や行政・
大学等の参加による
検討委員会の様子
（平成12年）

地域の住民の方の
参加による
ワークショップの様子
（平成12年）

【赤井】　　同じく千里ニュータウンから参りました赤井でございます。住んでおりますところが、片岡さんは吹田市なんですけれども、私は豊中市に住んでおります。千里ニュータウン全体の３分の２が吹田市で、３分の１が豊中市なんです。その３分の１の豊中市に住んでおります。

街角広場は、この間、１０月８日に無事５周年記念パーティーが終わりました。ただいま６年目に入っております。資料の地紋になっておりますのは、以前の街角広場がちょっと移動したときの床に書いてございました千里ニュータウンの地図なんです。地図の真ん真ん中にあるところが街角広場の場所なんです。

街角広場がどうしてできたかというのは、国の事業でありました「歩いて暮らせるまちづくり」の中で、いろんな地域の人に相談しました結果、アンケートとかヒアリングの中から出てきたのが地域交流できる場所が欲しいということだったのです。そのときのワー

クショップやらいろんな様子を写真資料にしています。

そのときに、近隣センターがシャッターの降りたお店がたくさんになっておりますので、そこでそういうものをしようということで、私たちが「やりたいね」と言ったんですけれども、なかなか場所が借りられない。この困難さというのはほんとうに独特のものがあります。これは皆さんに言ってもきっと伝わらないだろうと思う苦難の道でありました。それを豊中市がほんとうに苦労に苦労を重ねて借り上げてくれ、市の予算でもって設営してくれました。それから第１回の実行委員会を開いて、何にしよう、どんなことをしようという話し合いがあって、開設するまでたったの１０日でオープンしてしまったんですね。「何はともあれ開きましょう。近所の人が皆でいろいろ交流したいんだから、ただお茶が飲めればそれでいいんじゃないですか」というぐらいのことでオープンしました。そのときの裏話を知っている方がこの会議の中にいるんです。ですから、私があんまりしゃべれないんですよね。私は表の話しか知りません。その辺で

笑っていらっしゃいますけど、裏の難しい話はあったと思うんですけど、私たちは表のきれいな部分で地域で開設して、お茶を飲める場所をこしらえました。こしらえたといいましても、中だけはきれいにしてくれましたけど、表はしてくれておりません。ですから、表を一生懸命、もう開設の前日まで掃除をしました。窓ガラスも拭きまして、屋根のクモの巣取りから何から何までいろんなことをして、そういうポスターをつくって開設をしました。

＜社会実験の様子と普段の街角広場＞

それから、いろんなことをやってみようということで、いろんなことをやりました。障害者施設の方が来ていろんなデモンストレーションをやりました。当初から大阪大学がかかわってくれていますので、学生さんが地域交流等のいろんなイベントをして、地域の人の意見を聞きながら、大学の授業にも生かすという形で、それは現在もずっと続いております。

１２月には地元の中学生、それから地元のおじさんとのジョイントコンサートもしまし

た。それから、豊中市の中で眠っておりました、ほんとうにお蔵に眠っていた郷土玩具ですね、いろんな玩具が何千点とあるんですけど、それの展示もして皆様に見ていただきました。

それから、千里は竹のまちです。千里ニュータウンの近隣に竹やぶがあります。そこでタケノコ掘りをしようということで、第１回目の春にタケノコ掘りをしました。そうしたら、タケノコがいっぱいとれ、そのタケノコを焼いたりしてパーティーをしました。だんだん注目を浴びるようになり、マスコミにも取り上げられるようになりました。

千里ニュータウンの国際シンポジウムのときにいろんな国の方が来られて、街角広場をのぞいてくださいました。私も何かしゃべっていますけれども、私は外国語はチンプンカンプンです。わかったような顔をしていますけど、通訳がついておりましたので、心配なくできました。

子供たちが街角広場で、とってきたドングリで朝からドングリごまをつくったり、七夕のときには大きな笹で笹飾りをします。それから、毎年お正月前にしめ縄づくりをして、それで１年の終わりにしております。

「コーヒー・紅茶だけだったら何か口寂しいから、ケーキか何か欲しいね」という声がありまして、スーパーで売っているケーキでは意味がないので、近隣の社会福祉施設、障害者施設でつくってもらっているクッキーとかケーキを売るようになりました。

千里グッズの会といって、千里にはお土産がございませんので何かということで、千里の景色を絵はがきにしてみました。それも大阪大学の学生さんたちが一緒になってつくっております。絵はがき売りを今でも街角広場ではずっとしております。

土曜日の午後には、少年野球の練習を終わって来た子供たちが、ここでお昼御飯を食べて、また帰って勉強するそうです。

「千里竹の会」、千里の竹やぶというのは豊中市の持ち物なんです。豊中市の公園の中のを切りますので、そこへ一番初めのタケノコ掘りのときに行ったら、竹やぶが荒れほうだいなんです。竹と竹とがくっつきそうにいっぱいあって、それでは竹やぶが死んでしまうということで、その中の有志の人が何回も話に話を重ねて、「千里竹の会」というのが生ま

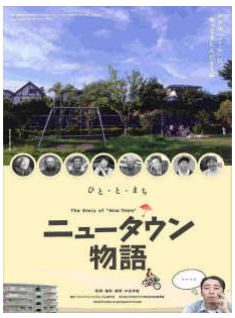
れました。今、千里の竹はその人たちに守られてきれいな竹やぶになっております。今年のタケノコ掘りのときは、もう去年ぐらいからですけれども、竹の会の人にご指導願って、整備された竹やぶからきれいなタケノコがとれております。ほんとうに、売りに行ったらきっと高く売れるだろうなと思うようなタケノコがいっぱいとれるようになりました。ごらんください。今年のタケノコ掘りの見事なタケノコです。ほんとうに売りに行ったらすごくたくさん売れると思います。

それから、近くに、ちょうど前の広場にケヤキの木が何本もあります。秋になったらお掃除するのに困るぐらいの落ち葉です。それを集めましてプールに入れて落ち葉プールをします。子供たちがすごく喜んで、遊びます。それで、落ち葉が全部出てしまうと、また中へ一生懸命入れます。入れているかなと思ったら、踏んづけるから、二、三日もたてば落ち葉がだんだんだんだんかさが低くなってくる。今度はビニール袋にいっぱい、子供がどこかで落ち葉を拾ってきて、また入れて遊ぶということをして、最後は、これがまた畑の腐葉土になっていきます。

子供が学校帰りに来て、「おばちゃん、お水ちょうだい」ってカウンター越しに言ってきます。

それから、千里には田舎から来た人が多くて、いろんな故郷のことを思い出したりなんかして、季節を感じるようにしようといって、七夕とかタケノコ掘りとかもそうなんです。地域でできる渋柿をいっぱい持ってきて、毎年干し柿をして、そのできた干し柿はみんなまた街角に来たお客さんたちがお茶菓子に食べております。

＜街角広場から生まれたもの－１周年から４周年まで＞



それから、何か文化的なこともやりたいということで、同じように岡山のニュータウンを出身された監督さんがつくられた映画「ニュータウン物語」の上映会もしました。このときは、何かすることって楽しいですよね、千里中央の駅で一生懸命、ロゴ入りの帽

子をかぶって映画宣伝に走り回りました。

毎年やるオープン記念の１周年目のときには、近くの小学生、中学生が来て、いろんな演技もしてくれます。それから、大阪大学も一緒になっていろんなことをしてくれています。

２年目、竹の会の人がデモンストレーションで、竹を割ったりなんかして見せてくれました。

記念パーティーでは、生ビール飲みほうだいなんです。今年もやりましたら驚くことに１５リットル入りの樽が５杯あきました。でも、皆さん、参加費１００円ですよ。１００円で生ビール飲みほうだいなんです。

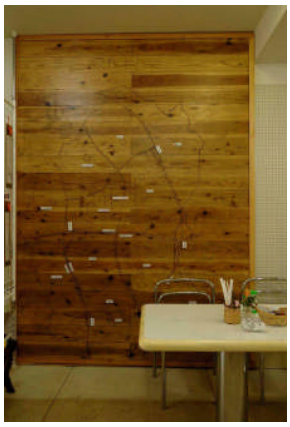
３周年のときに大阪大学の学生さんはフィールドワークの報告なんかをしてくれましたし、近くの小学生がソーランを踊ってくれました。

毎年同じようなことをしておりますけれども、毎年毎年、これを楽しみに待っていてくれる人もたくさんいます。いろんなイベントをしたものを、ポスターやらパネルにして張っております。

＜街角広場移転＞

４周年のとき、この５月にゆえあって――わざわざゆえあってと言っておきますけれども、ゆえあって、場所を変わらざるを得なくなりました。そのときに、近所の近隣センターの中のお店の方がご理解いただいて、そのお店を借りました。１０年間シャッターが閉まっておりました。そこを借りて、ほんとにどうなるのかなと思ったような真っ黒のところで、もうどうしようもないなと思って、「こんなところで、いやや、コーヒーなんか出せないわ。気持ち悪い」って皆が一瞬言ったんですけど、それが、地域の人の協力でだんだん変身していきます。プロのペンキ屋さんなんですが、ペンキも持ち込みで全部ボランティアで塗り替えてくれました。近所の方がみんなできれいにして、小学校の先生まで機械を持って床磨きをしていただいて、これ、驚くなかれ、お金はほとんど使わないで、ゼロ円に近いです。だから、近所の

人を巻き込んでものをすると、こんなことができるんだなと、私はもう我ながら感心しております。「街角広場が移転しました」という表示をして、街角広場の新しいところでの内容を出しております。



もとの場所にありました床の部分を切り抜いて、５年間踏みに踏まれた床をきれいに洗いをかけて、ニスを塗って、組み立て直して、今度の壁にモニュメントのようにはめ込みました。これは、ここに苦労してつくっていただいた方がいらっしゃいます。

またその仕上げにきれいにまちの名前も全部入れてくださいました。これが千里ニュータウンの全部の地図です。ずっとこういうふうに来て、これが千里ニュータウンの地図になっております。

それから、これが１年目のお金をいただいたコーヒーの量です。２年目、３年目、４年目、５年目、以上全部でこれだけ５年間でコーヒーが出ております。

＜街角５周年パーティ＞

この間１０月８日にありました５周年パーティーのとき相変わらずいつでも来てくれる中学生の和太鼓グループがありました。皆さん、ほんとうに生ビールを飲みながら、老いも若きも和気あいあいとしています。

街角広場の５年間をいろんなパネルで説明しています。最後にビンゴゲームをします。ビンゴゲーム、大体参加者の３分の１ぐらいは当たるように設定しております。こういう状況で５周年の記念パーティーをさせていただきました。

私たちの街角広場は、どんなことがあっても地域の方と一緒にやっていく、地域の方を巻き込んでいくというのが主義です。５周年記念のときも、長い期間の広報はしなかったんです。ポスターをほんの４日ほど、五、六枚、地域に張っただけです。五、六枚張っても、３枚は街角広場の表と中に張っておりま

して、１枚は小学校の前の掲示板、もう１つは皆さんが歩いてくださる道々の掲示板、これを３日か４日張っただけで二百何十人の方に来ていただきました。変わらず２００人以上の参加者を得て、１人１００円で生ビール。といいますのは、私たち街角広場は、お金をためていく必要を全く感じておりませんので、たまったお金は全部地域還元に使おうということでやっております。これは地域還元の１つです。来ていただいた皆さんにお返しするということで、パーティーでできるだけ使ってしまう。それから、本年では、夏の暑いときに小学校でどうしてもということで､各教室に全部扇風機を買うことになりました。そのときに二十何万円要るんですけれども、小学校には予算がありません。街角広場は肝っ玉が大きいんです。また１０万円寄附しました。それから、夏祭りとか、そういういろんな地域行事には必ずそういうふうにして協賛をさせていただくということで、街角広場がずっと続いていく。

「これからも続いていってほしいな」ってみんなに言われて、これにはボランティアさんの協力が必要です。そのことにつきましては、私が「勝手ボランティア」と言っておりますけれども、ほんとうに「手伝いましょう」と言ってくださる方はどなたでも、何も私のまちに限ったことではありません。今、京都のほうからも来ていただいております。それから、ありがたいことに、１回、街角へ協力してボランティアに入った方は、お引っ越ししてもバスや電車に乗ってボランティアに来ていただいている。１回来たら何だか楽しいんでしょうね。ボランティアをするときの根本は、私の考えでは、ボランティアをしてやっているとか、してあげているじゃなくて、自分が楽しいからやっているんだ、その結果、きっと自分が楽しくやれば来た人もみんな楽しいと思うんです。だから、自分が楽しいから来る人も楽しい。やっぱりまた次の機会に来たい。そういうものの連鎖で今やっておりますので、街角広場の状況はこういうことです。

あとは、何かございましたら、はしょりましたけど、どうぞよろしくお願いします。

【富永】　はい、ありがとうございます。何か好対照のような、片岡さんの話と赤井さんのお話であるような気がするんですね。赤井さんは何か専門職というのは持っておられますか。

【赤井】　専門職はありません。私の専門は薬剤師でございます。

【富永】　僕はまた、こういうコミュニティ活動が専門職だなというふうに思ったんですけど。

【赤井】　いえいえ、そういう勉強は、こんなことを申し上げたら何ですけど、私はほんとうに社会的にはゼロ人間なんです。会社に勤めたこともございませんし、学校を出てそのまま結婚して、全然就職して働いたことがないんです。ですから、欠陥人間なんですね。ですから、街角広場でいろいろ勉強させていただいています。

【富永】　いや、僕の感想なんですけれども、お母さんの心でまち育てをやるとこうなるのかなというような気がしましたね。

【赤井】　はい、それは言葉を受けますけど、うちの息子や娘が、もう息子も４０になりますけど、その息子や娘が言いますのは、「おかん」――大阪ではすぐ「おかん」と言います。「おかん、わしらが偉いから、おかんは今、そんなことをしていられるんやで。わしらのおかげや思うて、おかん、わしらに感謝しなあかんで」って言われております。

【富永】　僕は、自分を中心に、家族、地域の身近なところ、だんだん大きなところへ同心円的に広がっていくというふうに、こう思うんですね。そんな中で、片岡さんの専門職は何でしょうね。

【片岡】　私の専門職は不動産のコンサルタントをやっておりますので、そのものストレートです。

【富永】　じゃあ、宅建や何かもお持ちで。

【片岡】　持っております。

【富永】　それで安心いたしました。何か不動産のそういう取引みたいなところへ持っていって首を突っ込んでいこうとされていて、そういう資格がないとなかなかやれないなというふうに思って。今のお二人の話を聞いていて思うのは、改めて、地域活動というのはその人らしさというか、お人柄と専門職と生きざまみたいなものがそのままストレートに出てくるんだなと。人の数ほど輝きがあればいいのかなというようなことを思って、ちょっと感想としておきます。

それでは、すいません、今度は吉田さんのほう、発表をお願いいたします。私ちょっと、映すのをお手伝いいたしますので。

● 高蔵寺ニュータウンから活動報告

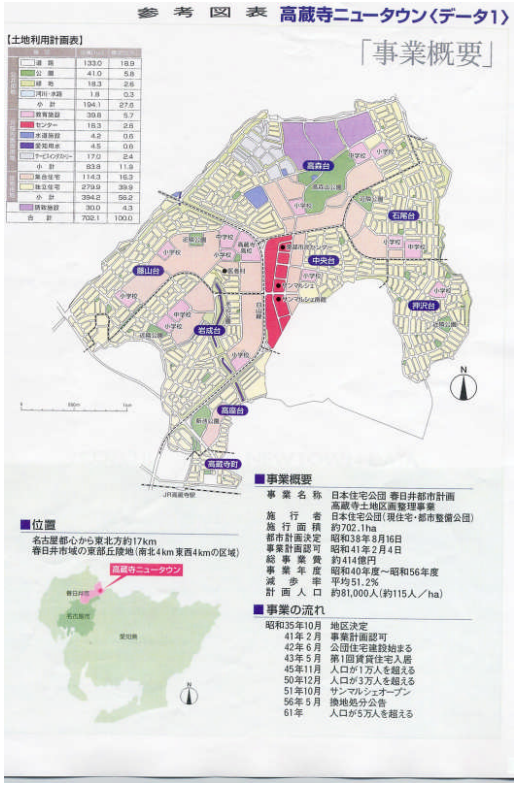
春日井市コミュニティ推進連絡協議会
会長　吉田　光雄

＜春日井市・高蔵寺ニュータウンの概要と特徴＞

【吉田】　　こんにちは。私は皆さんのようにスライドがあんまり好きじゃないものですから。といいますのは、どうしても原稿にしますと小さくなってしまうものですから、それをもう一度見てもらうというのは大変だということと、また後ほどおいおいお話をいたしますが、取り巻く皆さん、高齢の方が多いものですから、そういうものにあんまりなれていないということで、私はできるだけ文章表現をしたものを資料としています。皆さんに配られた資料の中にこのような格好のものが２つに分かれて入っております。１つはいわゆる説明文章編、１つはデータ編ということになっております。何しろ限られた時間でございますので、全部をご説明するわけにはまいりません。ですから、要点だけ押さえさせていただきますので、それぞれまた後ほど折を見てお目通しいただければと考えます。

「出席者と活動の紹介」（本書61頁参照）という文書が、皆様のところへ渡っております資料ファイルの２枚目ほどに来ていると思います。私は、高蔵寺ニュータウンで、ここにありますように「新しいふるさとづくり」をモットーにということです。春日井市の一角でございます。

現在、人口が春日井市の６分の１ぐらいのところです。まさに高蔵寺ニュータウンでございます。そして、これも皆さんのところに資料が入っております。カラーがついておりませんので、カラーのものをここに出させていただきましたが、上（北）か



らいきますと、高森台とか、私が住んでおりますのが石尾台とか、地名にこういう台がついております。これ、高蔵寺ニュータウンの特徴でございまして、まさに丘に登ろうというコンセプトで住宅公団が開発をした。今の都市機構さんが開発をされたということでございまして、事業名称は、日本住宅公団の「春日井都市計画高蔵寺土地区画整理事業」という正式名称であります。３８年に計画が決定しまして、昭和４３年に第１期入居でございます。ですから、入居して既に３８年ですね。

高蔵寺ニュータウンの特徴として、計画の一つの特色、一番のポイントは、高蔵寺町という昔から由緒ある地域でございますが、そこはJR中央線の駅です。そこから北に向かって丘の部分を開いたというのが高蔵寺ニュータウンでありまして、駅を中心にしてそれぞれのところへワンセンターシステムという格好で延びています。これが高蔵寺ニュータウンの特徴であります。

＜少子・高齢化の進展＞

春日井市とあわせて高蔵寺ニュータウンの場合も一時人口が増えまして、５万１，０００を超えた時期もございましたが、今、やはり少しずつ減少しております。現在、平成１８年の４月では４万８，４６１人という数字になっております。ただ、それと反比例して、高齢化率がどんどん上がっています。先ほど千里さんのほうもそうでありましたように、地域によって高齢化率がすごく違うと。同じニュータウン内でも、例えば３０％近いところもありますし、１けたのところもあったりします。

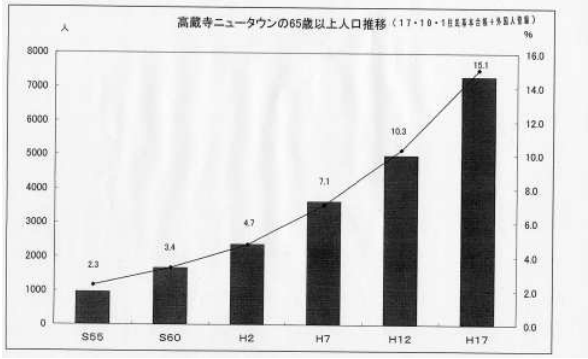
今度は、人口と住宅建設の関係、現在の人口、平成１８年４月１日現在、４万８，４６１、１万９，３０８世帯、平均世帯人口２．５人ということでございます。どんどんと高齢化とあわせて少子化、まさに少子・高齢化が進展している部分がございます。

児童数もうんと変わっておりまして、ピークは昭和５７年ですけれども、ニュータウン全体で６，４９７名が、２４年経った平成１８年の４月では２，６７４になっております。ですから、私の住んでいるところの学校でも６学年各１クラスです。特殊学級を２つ持っていますので、クラス数としては８つですが、学年ごとにクラスがえという一つのときめきがないという学校になっているわけです。

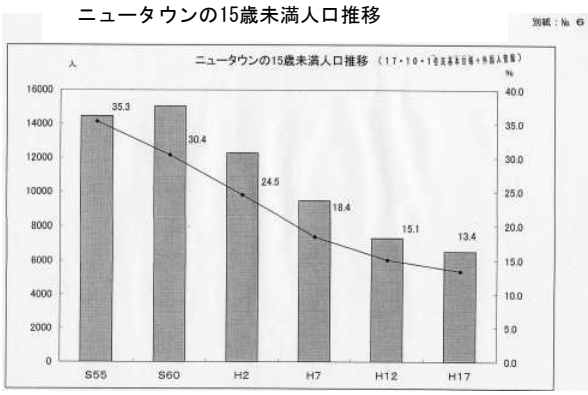
６５歳以上の人口の推移、右肩上がりということで、昨年の国勢調査のデータが、１５．１、どんどん右肩上がりに上がっていっております。

今度は児童数の減少のことがデータとして入っております。１５歳未満の人口推移ということで、昭和５５年、３人に１人、３５．３％であったのが、今、１３．４％ということに。昭和５９年６，６９６人をピークとして減り続けておる状況です。

高蔵寺ニュータウンの65歳以上人口推移

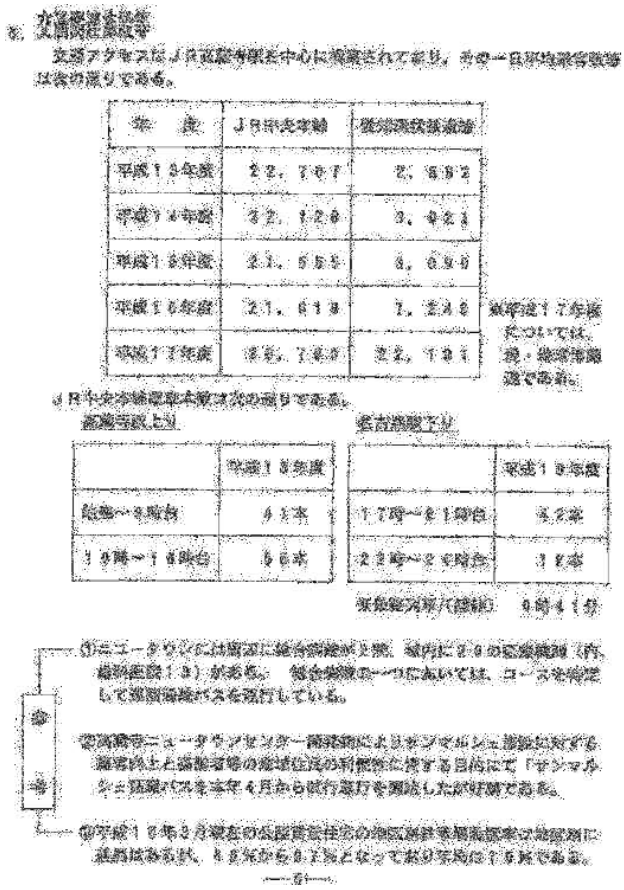


ニュータウンの15歳未満人口推移



＜ニュータウンの循環バス＞

ニュータウンも、さっきワンセンターシステムと言いましたのは、高蔵寺の場合も、いわゆる陸の孤島ではございませんけど、少し離れたところにまちができておりますので、交通問題がやっぱり大きなネックになっています。１つは、ニュータウンの周辺に総合病院が２つと、それから地域内に内科医院や歯科医院等も入れまして２６の医療機関があります。今あるお医者さんを中心にして病院巡回バス、そういう個人病院の巡回バスのことが考えられないだろうかという話が出ております。それはさておきまして、総合病院の１つのほうは、コースを特定してダイヤを組んで巡回バスを出しているという状況がございます。それからもう１つは、平成１８年の４月からですけれども、高蔵寺ニュータウンセンター開発といいます、ニュータウンの地域開発を行っております都市再生機



構と愛知県と春日井市とでつくっております第三セクター会社でございますが、そこが商業施設を中心にした集客ということとあわせて、高齢者の地域住民の利便性に資するという目的で「サンマルシェ循環バス」というのを運行を始めました。１年間のテスト試行ということでございまして、年間１２万人利用があればいいがなということでございましたが、９月まで非常に順調でありまして、今、１５万超えるんじゃないかということで、確認したところ、もう試行ではなく本格的な運行ということに１２月には結論が出るであろうということで、地域住民にはうれしい話です。これも１００円の運賃で地域内を２つのルートで回っております。

＜コミュニティと地区社会福祉協議会＞

さて、冒頭の「出席者と活動の紹介」というところに戻りますけれども、私たちの場合は、ニュータウンのみならず、愛知県春日井市、人口３０万の都市でございますが、そこに小学校が３８ございます。来年の４月には１つ増えまして３９になりますけれども、そこのそれぞれで既に町内会、こちらで言う町会とか自治会というのは組織化されておりますが、そこへかかわる方々の加入率も少し下がりぎみだという大きな問題・課題が出てきています。ですから、私たちとしては、まさにそういうことを補完する意味で小学校区単位でコミュニティ組織をということで、これは春日井市も早い時期からそういう施策をとっておりまして、今、３８の小学校のうち１４の小学校区にコミュニティ地区を設定してございます。ニュータウンでは１０小学校がありますが、そのうちの５つのところでコミュニティ推進地区ができているということでございます。

ですから、私はこういう考え方でこれまで進めてきました。先ほど申し上げた「新しいふるさとづくり」というコンセプトにして、コミュニティ、そして社会福祉協議会――このことにつきましては、まさに福祉との関係でございます。そういうことにおいて、そこの組織化とネットワークを構築すること、もう１つは、春日井市の行政と連動してこういう活動をしていくこと。そんなことで、今回この部分につきましては、福祉における高齢化について、さあ、どうしようかという高蔵寺ニュータウンの中の我々の周囲での課題でございます。それ以外に、防犯の話、そしてリサイクルの話、そういうようなことも具体的にコミュニティとして取り組んでおる中で、今回については、申し上げた近々の課題であります高齢化について、我々地域住民としてどう対応していくことがいいのかなということを考えておる矢先に、今回の企画をご案内いただき、そしてお誘いいただきましたの

で、非常に心強く思っています。先進地事例という格好で受けとめさせていただいて、そういうことを構築していきたい。私のほうとしては、先にハードとソフトというふうに割り切れば、どちらかというとソフトの部分ですね、住まいというのはもう少し後回しになるかと思いますが、暮らしということについて我々の周囲のいろんな人的ネットを活用して組織を構築して、将来的には、やっぱりＮＰＯを設立して、対応していくことが重要じゃないかなと考えております。

今回のこのことを含めて、春日井市の行政からもエールを送られております。この資料のタイトルに「高蔵寺ニュー（ライフ）タウン」と表記しておりますが、市長が、ひょっとしてもうニュータウンは表現が適切じゃないと思うので、場合によってはオールドタウンとも書けないし、ライフタウンという考え方を一つしたらいいんじゃないかなということを言ってくれました。今日、こういうことで皆さんと意見交換をしてくるという話をしましたら、行政としても行政同士で、千里さん、そして多摩さん等とぜひ一遍、共通課題をみんなでするテーブルをつくるようにと担当に指示しておいたと。呼びかけがあろうやと思いますけれども、そんなことを今日ここで申し上げておきたいと思います。

私が、高齢者問題、特にそういうことで大きく１つ最近課題と思っていますのが、「呼び寄せられ高齢者」というキーワードです。「呼び寄せられ高齢者」。例えば私の周囲でニュータウンでもう何十年か住んでいる方々が、昔、若いころ、ふるさとに親を残してきたと。そして、気がついてみたらもう高齢になったし、場合によっては片親になってしまった。だから、今、自分の住んでいるところに呼び寄せたいということで、呼び寄せます。呼び寄せられた方が「呼び寄せられ高齢者」でありますが、そういう方に２つの側面があります。１つは環境に非常になじみにくいということ、そういう方々を、例えば地域の高齢者クラブが積極的にお誘いするように仕向けるんですが、なかなかそういうことにならない。何かそういう高齢者の特定のサロンをつくるのもいいのかなということも１つ考えています。それぞれの方が環境が変わられるということで、もう１つ大きなことは、かなり高齢になって、正直言ってかなり弱ってから来られるものですから、地域風土になじめずに、直接施設に入られるというようなこともあります。その辺のことを大きな課題として考えています。

＜ちょいボラの勧め＞

私は昭和５４年から自分の住まいをつくると同時にまちづくり――当時の日本住宅公団が高蔵寺ニュータウンの２０周年記念事業という格好で、コーポラティブハウス、グループ分譲制度を実施、日本の先駆けと私は自負しております。せっかくのチャンスを５４年の８月に与えられたので、自分の家をつくると同時にまちをつくろうということで始めたのがこういうことへのきっかけであります。また後ほど話題になるかと思いますが、私も人生を少し変えてこういうことに頑張っております。私が一番のコンセプトに考えていますのは、「ちょいボラ」の勧めです。ちょいとボランティアということを十何年言い続けています。「ちょいとボランティアしましょうよ」。そして、「ちょいボラ」の方々が、結果、大きなボランティアをしていただく、「大ボラ」になるということ。言いかえれば、義務感から使命感への変化。私の地域でも、町内会長を請け負った、たった１年だからやるんだと、そういう義務感で来た方々をうまく巻き込んでといいますか、地域の中に入っていただいて、こういうことをしなきゃいかんのだという使命感まで到達するケース、周囲でたくさんそういう方々を知っていますし、一緒に動いています。基本的には「ちょいボラの勧め」、こんなことが私のキーワードということを申し上げて、事例紹介を含めてお話を終わらせていただきます。

ありがとうございました。（拍手）

【富永】　　ありがとうございました。何か全くコメントする必要がなくなってきたような気分なんですけれども、コミュニティというのは豊かに人の個性が出てくると先ほど言ったんですけれども、そんなようなことかなと。やはりベースにみんな人間関係を求めて仲よくしようというところから、徐々に徐々に昇華してテーマが出てきて、それが片岡さんのような専門職の方々を巻き込みながら、個別の課題解決の方向に向けて根っこを持って、フィールドを持って進んでいくのかなというようなことが見えてきたと思います。

それでは、筑波研究学園都市人ということで、井口さんのほうからお願いいたします。

http://www5e.biglobe.ne.jp/~tug/

● 筑波研究学園都市から活動報告

特定非営利活動法人　つくばアーバンガーデニング
事務局長　井口　百合香

＜筑波研究学園都市の開発＞

【井口】　　つくばから参りました井口でございます。よろしくお願いいたします。

筑波研究学園都市の場合は、皆さんよくご存じだと思うんですけれども、今のお三人のまちとは全く違う問題を抱えているのかなと思います。研究学園都市というのは、職住接近のニュータウンということで、大学と研究施設を東京からつくばに移して、そこに研究者の家族が一緒に住めるようにという目的のためにつくられたまちです。ですので、定住してということではなくて、どんどん人口が入れかわっています。そこにずっと住まおうと思って住んだ人たちではない人たちが主に住んでいるニュータウンかなと思います。しかも今、つくばエクスプレスが通ったということで、またさらにニュータウンが計画されております。どんどん建設されている最中だということで、非常に活気あふれたまちの状況ではあると思います。その中でいろいろな問題があると思うんですが、住みかえ問題ですとか高齢化問題ですとか、そういうところはちょっと違うのかなと思います。

つくばの場合には、違う面の問題をずっと持っていたと思います。振り返ってみますと、１９６３年に筑波研究学園都市の建設が閣議で了承されたというところから歴史が始まります。１９８０年ぐらいに研究学園都市がおおよそでき上がった、概成と言われていると思います。そして、１９８５年に科学万博が開かれまして、このときに、つくばのセンタービルですとかホテル、ノバホールなどを含むセンタービルができて、都市的な体裁がかなり整ったと言われています。１９８７年に４町村が合併してつくば市が誕生しました。来年、２０周年を記念する行事が開かれると聞いております。その後、１９９７年に筑波研究学園都市の開発が一応終了したということで、今後の研究学園都市を全てつくば市と市民の手にゆだねられる時期がございました。

このときに、一応「つくば」はできたけれども、実際に魅力的なまちになっているだろうか、これからのまちづくりはどうなるだろうかということを市の行政も考えたし、市民も本当にこれでいいんだろうかと見直しがされるような時期がございました。市民の間で

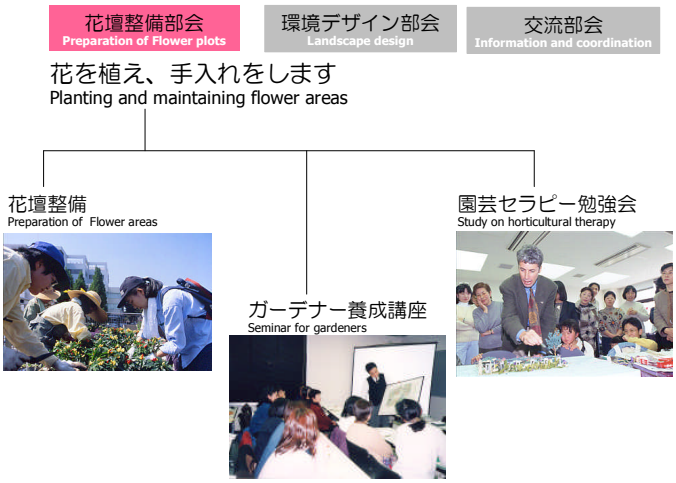
大きな課題と思っていたのは、交通事情が全く車社会のまちであるということ。それから、立派な建物はたくさんあるけれども、人けが少なくて寂しいまちだと皆さんも聞いておられると思うんですが、そういうことが課題として提起されていたと思います。

＜つくばアーバンガーデニングの誕生とおいたち＞

そのときに、つくば市の幹部がつくば市の中心部を見て回ったそうです。当時は鉄道がありませんでしたので、バスセンターがまちの玄関口だったんですが、このバスセンター。そしてつくばセンター広場、これは、つくばセンタービルの向かい側の郵便局の前にかなり広い場所がありました。桜大橋という大きな歩道橋のたもとなんですが、一応草を刈った後なのでまだきれいなんです。年に１回か２回草刈りが入る以外は草ぼうぼうの場所というようなことで、かなり見捨てられた雰囲気でした。最初にぴかぴかにきれいにできたまちが、随分敷石なども黒くなって、大変有名な広場ですが、寂しくなっていた。これを何とかしたいと、当時市のほうで考えられました。つくばには農家がたくさんあるんだから、つくばの農家の花を市民の手で植えてまちをきれいにしようと考えられまして「つくばアーバンガーデニング」の誕生になったわけです。

これの下敷きにいろいろなことがありまして、緑の活動が市民の間で行われていました。例えば雑木林で遊ぶ会。つくばの農村の中の里山をお借りして手入れを都市住民がするかわりに、ここで自由に遊ばせていただく活動が行われたり、女性庭師講座というのを私どもがやっていたのですが、女性の庭師を育てる活動とか、それをもとに公共の場所を市民のボランティアで美しくする活動が行われておりました。雑木林で遊ぶ会の活動は、この後、緑が都市部にとってもとても大切なものだということが確認されたことで、「新田園都市・中根・金田台（なかこん）」のまちづくりへとつながっております。これは後ほどちょっと触れたいと思います。

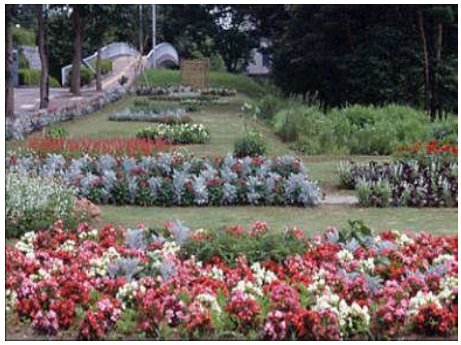
＜つくばアーバンガーデニングの３つの部会と活動＞



つくばアーバンガーデニングは、つくばの農家の花でまちを活性化することを考えて始まったのですが、組織をつくるお手伝いを、女性庭師講座からの流れで私ども「暮らしの企画舎」がすることになりました。市民、県、市、都市基盤整備公団――今は都市機構ですが、筑波大学の専門家の皆さんなどが、みんなでいろいろな役割を果たしながらまちをきれいにしていきましょうということを考えまして、花壇整備部会、環境デザイン部会、交流部会という活動が始まりました。花壇整備部会が中心になるわけですが、３つの活動がありました。

私どもつくばアーバンガーデニング（ＴＵＧ）の特徴の１つは、ＮＰＯ的に、当時から有償で働く専門家といろいろな人たちがいろいろな形で協力し合いながらやっているということです。これは１９９８年の５月に初めての花植えをやったときの写真ですが、つくばセンタービルの向かい側の広い広場に市民の手で花を植えて、まちをきれいにしようという活動が始まった第１回目のときです。

その年の冬のバスセンターの様子です。これが２年目の夏の様子ですけれども、この橋のたもとも、余った苗を植えてこんなふうにきれいになりました。まちの中が農家の花でいっぱいになって、



こんな風景が当たり前な状況になってきました。　全国花のまちづくりコンクールというのがございますが、ＴＵＧの２年目に建設大臣賞というのを受賞しました。先ほど「ちょいボラ」というお話がありましたけれども、いろいろな人たちが、ちょっと簡単に参加できるような仕組みというものも評価されて、こういう賞をいただいたということです。

そういう人材を育てていこうと養成講座を行い、公共の場所にモデルガーデンをつくって、卒業制作としています。

ユニバーサルデザインということがこのごろ言われますが、車いすの方や目の見えない方も楽しめるような庭を公共の場所につくりたいと、いろいろな知恵を寄せ合うワークショップをいたしました。松見公園という、筑波研究学園都市ができた最初のころにつくられた公園、そこにみんなでつくる「いやしの庭」というのを考えたわけです。

都市緑化基金と第一生命保険会社がやっている緑のデザイン賞というコンクールがございます。それに応募して緑化大賞をいただき、施工費用をゲットしました。１，０００万円までの施工費用を出してくださるという賞です。市民団体が公共の公園内にガーデンをつくりまして、土地は市からお借りし、上はＴＵＧのものという位置づけなんです。新しい公共ということで、大変珍しい事例なのではないかと思っています。隣に実際に病院がありますので、車いすの方が毎日のように散歩にいらしたり、月に１回はガーデンコンサートやバザールとかを催したりして、だれでもが楽しめる場所をつくり出しています。

環境デザイン部会というのは、国策でつくられた大変立派なまちですが、市民の手で、それがほんとうに親しめるものになっているか、使いやすいものになっているかを検証するということで、ワークショップやデザインなど制作をやってきました。

センター地区の公共の駐車場に、市民の手づくりプランターを置いて、そこに花を植えることもやっておりましたが、味気ない風景がちょっと違うものになったかなと思います。

交流部会というのは、花を通して触れ合う。花のまちづくりは、花を植えるのがメイン

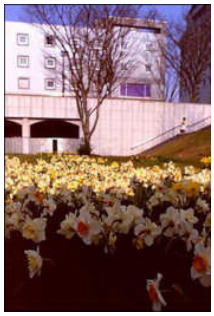
ではなくて、それを通して人と人とが触れ合うことだと思います。

「１００本のクリスマスツリー」という事業があります。これは、寂しいセンター広場をどんなふうにしたら楽しくできるかなと考えて始めたものです。絵をかいて応募してもらいまして、今年で９年目になりますが、今年は１，００３枚の応募作が集まったんです。その中から何十本かを選びまして、地域のアーティストたちと絵に描かれたものを実際にオーナメントにつくっていくわけですね。

開かれたイベントの様子とか、つくられたツリーですが、専門家ではない、たまたま子供が絵をかいて応募して参加された家族の方が大変すばらしい作品をつくって、とても寂しかったセンター広場を飾っています。

第１回目のクリスマスの様子ですけれども、寂しかった広場が、子供たちとツリーで花が咲いたようになったと思います。これがイルミネーションですね。

＜つくばアーバンガーデニングの花景色＞



花景色の写真をお見せします。 バスセンターの数年後の様子です。

これは、筑波大学からスイセンの球根を、「要らないんだったら捨てるけど」と言われて、２，０００球ほどいただいてきまして、みんなで植えたものです。

２年ほど前のバスセンターの様子ですね。いろいろ植物が成長した

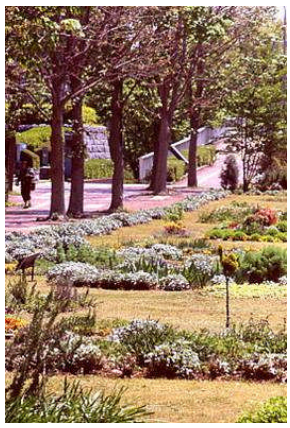
りして、だんだんちょっと歴史のあるまちの風景になってきたかなと思います。こういうものも、数年にわたってアーバンガーデニングが植えていたために、宿根草ですとかハーブですとか木ですとか、そういうものが育って、その間に一年草を植えるというような形です。公共の場所では、毎年、業者がかわりますので、一年草を植えるしかないという状況が今のまちの風景をつくっているんですが、そういうところが違うものを見せられたのではないかなと思っています。

７年目ぐらいのつくばセンター広場のペデストリアンデッキの花の様子です。

これが、私ども、初め、市が提唱する事業として実行委員会で始まりまして、その後、５年目にＮＰＯになって――市から「事業を委託するような形にしたいので」というお話がありまして、ＮＰＯをつくりました。

つくばアーバンガーデニングというのは、もともとこの市の中心部を市民の手で美しくしようということで始まったので、ＮＰＯとして独立するというのが正しいことだったかどうかというのがちょっと難しい点なのです。市から随意契約で委託されていたわけです。随意契約というのがなかなか難しい状況が社会的にございます。アーバンガーデニング的な事業が、いろいろなところが市民もかかわってやっていくという意味では、入札という制度にそぐうのかどうかということが１つ問題としてあると思います。平成１７年度から指名入札という形をとることになりまして、私どもＮＰＯの手を離れて、今、このつくばセンターの付近は違う形で管理されています。

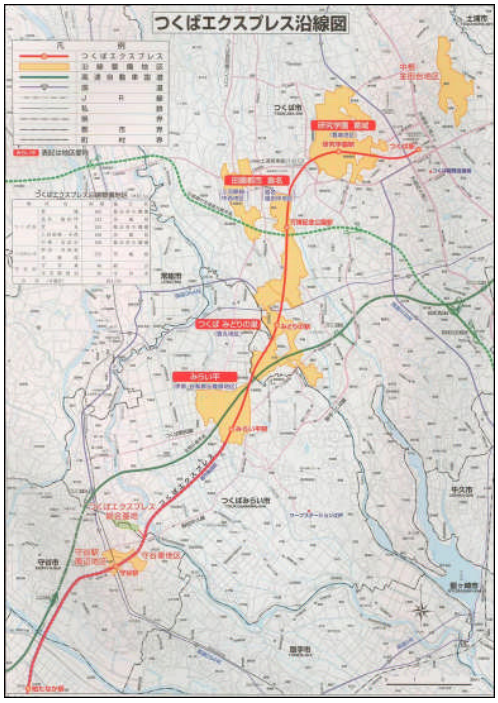
郵便局の前の広場、最初にあったところですが、ここは一年草を入れないで、ずっと続いていく宿根草だけで、お金をかけないで管理をするということで、７年目ぐらいの様子ですが、こんな状況になっていました。ところが、今、つくば市が再開発で、まちの真ん中の状況が大変変わっていまして、マンションがどんどんできたり、新しい建物ができたりしています。ここの場所も銀行が本店をつくるということで、どんどん活動の



場所もなくなってきたこともあり、今、この花の風景は見られなくなっています。現在は、大変寂しい様子になっています。

花のあるまちづくりというものがまだ日本では十分な市民権を得ていないのかなと思っておりまして、これは私どもとしては大変残念です。今まで市のご協力があって花のまちづくりの実験ができたということは、大変ありがたかったと思っております。その花のあるまちづくりを評価する仕組みがまだないので、日本の中でそれをずっと続けていくのは、全国どこでも大変難しいことではないかと思っております。ほんとうに花のあふれた、しかも質の高い景観というものを持ったまちづくりができれば、そこに人が住みたくなるのではないかなと思い、それをいろいろ研究していきたいと思っています。

＜つくば発「新田園都市・なかこん」のまちづくり＞



それから、ちょっと先ほど申し上げましたつくばエクスプレスの沿線の開発なんですけれども、今、計画されております。面積が約１，７００ヘクタールで、計画人口が１０万人ということです。これから少子化の時代にこういうことが実際にできるのだろうかということは、関係者皆さん、大変心配していらっしゃると思うんです。今のところは大変順調に、つくば市に住みたい人がたくさんいて、どんどん大きなマンションが建って、それもどんどん埋まっていくという状況です。つくばスタイルということで、住みたいまちと皆さんが今思っていらっしゃる状況があると思います。

先ほど申し上げました雑木林で遊ぶ会の地主さん、酒井さんという方がいらっしゃいます。その方が緑を大切にした新田園都市というのをどうしてもつくばにつくりたいと、もう十数年来いろいろなことを考えられて、仕組みを提案されてきました。これからできるニュータウンというのは、緑が非常に広くあって豊かな緑の中に住宅があるというのでなければ、絶対に人は住みたいと思わないだろうと。計画があって、そこが更地になったままだれも来ないというのは地主さんにとっても残念なことなので、新しい「緑住農街区」

というのを提唱されています。それがほんとうに大切だということを国でもつくば市でもだんだんにわかってもらえるようになって、これからつくばに「新田園都市・なかこん」というのをつくって、力を入れていこうということになりました。皆様にもこのシンポジウム案内を資料の中にお入れしましたが、１１月１２日に開催される予定になっております。私ども、新しい住民として雑木林で遊ぶ会というのをやってきたところからも、新しいまちに対するヒントがあったと聞いています。ニューニュータウンというのでしょうか、これが一番、今、つくばのニュータウン開発の中で新しい話題です。これをぜひ全国の皆さんにも育てていただきたいなと思っている次第です。以上です。（拍手）

「新田園都市・なかこん」まちなみのイメージ

【富永】　　ありがとうございました。

時間目いっぱいで、私の発表時間がなくなりましたので、ここでコーヒーブレイクにさせていただきたいと思います。

１５分のコーヒータイムを１０分に減らさせていただいて、予定どおり３時２０分から再開させていただきたいと思います。議事をちょっと変更いたしまして、ずっと話を見ていると、多摩の自分たちは、何かちょっと生意気かもしれませんけど、全体を少しずつ全方位に向かってやっているような感じがありますので、私の発表を使いながらみんなでディスカッション、同時並行でできたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

３時２０分まで休憩とさせていただきます。

（　休　　憩　）

● 多摩ニュータウンから活動報告と各ニュータウン人との意見交換

特定非営利活動法人　エヌピーオー・フュージョン 理事長　富永　一夫

【妻野】　　富永さん、始めましょう。どうぞ。

【富永】　　取りまとめの議論も含めて、私の活動発表なんかも含めて４時目標に行きたいと思います。司会のほうからは、５分、１０分押してもいいよと言われたんですが、私の最も信頼する方が早くビールを飲ませろというふうに思っているんじゃないかと思いますので、あまり長くならないように行きたいと思います。

発表させていただきます。

＜課題１：自分の老後の対策＞

富永の発表の第１番目なんですが、地域の問題というのは、やっぱりみんなが問題意識を持って、課題だというふうに感じた順番に物事が動いているのかなというふうに思います。私はこのまちに来て一番最初に、あ、これはえらいところに越してきたというふうに思ったのは、地域にまるで人間関係がない。子供たちにとってもふるさとなのにふるさと的でないというようなことから、自分の老後の対策としてスタートいたしました。お断りしておきますが、きょうの発表の方々もほとんど、片岡さんは都市計画だとかそういうところに不動産コンサルタントということで近いんですけれども、私もひっくるめて、あまり専門家ではないんですね。私なんか完全にビジネスマンで、門外漢であったわけですけれども、ですから、直接的に自分の老後の対策。吉田さん、申しわけありません、この辺で少しずつ議論に加わっていただけますか。大先輩でありますけれども、地域でこういう活動をされたのに対して、やはりご自身の老後の生きがいだとか、そういうふうなこともあったんでしょうか。

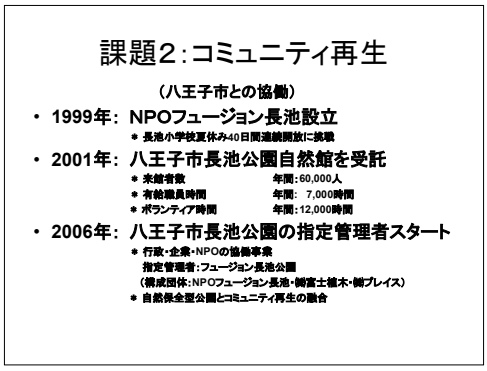
課題１：自分の老後の対策

- 1993年：　110世帯の団地に入居
管理組合の理事
- 1994年：　「平成狸合戦ぽんぽこ」の上映
- 1999年：　NPOフュージョン長池設立
徒歩圏に貢献
- 2003年：　NPOフュージョン設立
生活圏（多摩NT）に貢献

【吉田】　　もちろんそうですね。おっしゃるように、地域の課題を摘出して、それをみんなで共有して、そして課題解決に向けてどんなふうなことがいいんだろうかと。そういう工夫をすることから私は始めました。

【富永】　　なるほどね。ですから、何か地域のことというのは、僕もそう思っているんですが、専門家の方々が考えられるとどうも大所高所から、「団地再生とは」とか、何かえらく高邁なロジックから出てこられたり考え方から出てこられるんだけれども、まち育てみたいなところというのは、自分の身近なところから徐々に広がっていくのかなということが１つあると思います。そんなことをちょっと頑張り過ぎていて、「平成狸合戦ぽんぽこ」の上映会をやったりしている間に、フュージョン長池をつくることになったり、２個目のＮＰＯでありますフュージョンを設立することになったり、広がってきておるわけです。

＜課題２：コミュニティ再生＞



その次に私が思ったことというのは、旧地主の方々のコミュニティを、多摩ニュータウン開発というのは土地の区画整理事業もやったんですけれども、多くの場所を買い上げて、国家プロジェクトとして白地化して、真っ白にして一気にやったものですから、私が今住んでいるところなんかは旧地主の方々のコミュニティを全部破壊してしまったんですね。いっときには。また移り住んでもとへ戻ってきていただいているんですが、それは全く別な形のものになってしまったんじゃないかなというふうに思います。そんな中で、私の不安感でしたけれども、自分の子供に対してもふるさとを提供したいというような思いで、一番最初に長池小学校、すぐそばの小学校なんですが、新設校の夏休み４０日間連続開放に挑戦。この辺の心というのは赤井さんの心と一緒じゃないかなと。私が千里にお邪魔したことがあるときには、小学校のすぐ前のまさに街角という……。

【赤井】　　今もそうです。

【富永】　　あれから、二、三軒ずれられたというふうに聞いたんですけれども。

【赤井】　　いいえ。今のほうがもっと小学校に近いです。小学校の中からのぞいて

「おばちゃーん」って手を振っています、子供が。

【富永】　それで、何か裏口をあけてもらうようにしたんでしたっけ。

【赤井】　いえ、勝手にあけて入っています。

【富永】　あ、勝手にあけて入って。

【赤井】　はい。

【富永】　この裏口から学校へ入って出たりとかということが可能になって、先生たちも喜んでくださるという関係までいっていると。僕らも４０日間というのを始めたきっかけというのは、このまちは非常に特殊なまちで、多摩ニュータウン、特に新しいほう、若い人たちが越してきたところは極端でして、夏休みに人口が半減するほどいなくなるんですね。みんな親の田舎に、ふるさとはこっちよというふうに連れていかれてしまう。残った子供たちがかわいそうだというので、吉田さんが言われた「ちょっとずつボランティア」ですね。それで、１年に１日、２時間だけ先生でいいからやってくれないかというのを、４０人並べると４０日間連続開放に挑戦することになるんだというふうに始めたことが、僕らの活動の根っこ。コミュニティをつくり始めて、子供たちの面倒を見るとおとなたちが喜んでくれるという相乗効果につながってきた。おとなのほうから入ろうとするとなかなかつらくて、その辺はどうでしょうか、井口さんあたりも、おとなと子供とどっちのほうがコミュニティにとって取っかかりとして入りやすかったんでしょう。井口さんのところはおとなたちも結構頑張っているような感じがあるんですが。

【井口】　そうですね。小さいお子さんとか赤ちゃんを連れて来てくれる若いお母さんたちとか、あと、そういう方たちと年配の方たちとが一緒に作業して、そこで仲よくなれるというのが花にまつわる活動のいいところかなというふうに思うんです。

【富永】　なるほどね。私も２年前ぐらいつくばにお邪魔したときに、クリスマスツリーがとってもきれいで、子供たちがにぎやかに喜んでいたのを見ていて、子供たちがこういう思いをし始めると、親たちはもう見て見ぬふりできないんじゃないかなというふうな感じがしました。

吉田さん、何か。

【吉田】　具体的な活動の中でお話をしますと、やっぱり地域の課題解決を具体的に「ちょいボラ」ということでみんなで率先した一つの具体例を申し上げたいと思います。昭和６３年の６月に地域が荒れましてね、それが私たちのいわゆる生活安全、地域安全活動、その当時は防犯活動と言っていました。今、地域安全活動とか生活安全活動と言っていま

すのをスタートしました。それはまさに「ちょいボラ」で、企業に勤めている我々――私もその当時そうでしたけれども、会社人間の人が、夜、帰ってきて地域に貢献できることを願って、夜の８時からパトロールを何年かやりました。そうやって少しずつうまく巻き込む工夫をすることが大事なことだなと。それで、最近、そのようなケースでいきますと、全国的に、学校が今、非常に安心じゃないですよね。不安です。通学時間にいろんなことがあったり。私が住んでいます春日井でも熱心に取り組んでいまして、「春日井が安全・安心発信地」というキーワードもあったりするぐらい、全国にも先駆けてそういうことをしています。それに呼応して、それぞれの学校で大体ＰＴＡが主体になりまして、集団登校はいいんですが、下校をやっぱり地域の人みんなでサポートしようと。それは地域のご高齢の方も含めてみんなで見守り隊をつくりまして、それで学校からもきちっと情報を出されて、何月何日はこの時間が下校ですよという下校時刻表が毎月末に来るんです。そういうのをみんなで情報を共有して、それもやっぱり僕は「ちょいボラ」だということで、成果だと思っています。だから、ほんの少しずつのことを、立場、立場を変えて、時間帯が変われば立場も変わりますので、そういうことでやってきたのが、具体的な例としてこれまで地域再生という中でやってきたことです。

【富永】　　というようなことで、自分たちも小学生の子供たちの面倒を見始めて、八王子市教育委員会にとっても喜んでいただけて、東京都庁にも喜んでいただける時代が来て、それがＮＰＯ法人フュージョン長池（八王子市にある）と八王子市との連携を生み出すわけです。そんなことで八王子市役所は大変に喜んでくれて、自然保全型公園、都市公団さんが苦労してつくってくださった、多摩丘陵の原風景を残そうとしてくださった自然保全型公園２０ヘクタールの中に、体験学習施設（自然館というふうに言います）の管理を受託することに２００１年に成功いたしました。この背景には、こんなに地域に一生懸命ボランティアで活動している人たちがいっぱいいるのであれば、えこひいきではないよねという思いが働いてこういうことに結びついていったと思います。来館者数、現在でもそうですけれども、おおよそ年間６万人ぐらい、当時の課長さんが「月間５００人ぐらいでいいかね」というふうに言われたのに対して、１けた多かったという結果をずっと引っ張り出してきた。有給職員、２年前の数字ですけれども、７，０００時間に対して、ボランティア時間、ボランティアで来てさまざまな形で活動してくださっている人が１万２，０００時間。ですから、一つの提案なんですが、ボランティア時間というものを会計処理するということが、我々にとっての一つの評価軸じゃないか。お金の会計だけではなくて、自分の

大切な時間を「ちょいボラ」でもいいから、１時間、２時間というものを全部流さないで、全部足し算をしてみると結構な収支計算に出てくるんじゃないかなという体験をいたしました。

そんなことをやっておりましたら、昨年、指定管理者制度の流れの中でコンペをやって、何とか合格をいたしまして、今年の春から２０ヘクタールの公園の指定管理者を受託することになりました。それで予算規模も大きくなりましたので、それをまた原資にして、単純に公園管理だけのことではなくて、地域に、それを背景にいろんな自分たちの活動を膨らましていくということが重要であろうというふうに思っています。ただ、ここまで来るともう一つのＮＰＯ法人だけではできません。行政の方にもご理解いただいて、きょうも来ていただいているんですけれども、富士植木という造園屋さんとも連携をしながら、企業とも連携をしながらということを一生懸命やってきております。この２０ヘクタールの公園、今年はどういう状態かというと、土・日、土・日で公園に来る人たちが１，０００人を超えていて、ごった返しているというぐらいの状態まで来ております。やっぱりこのパワーというのは美しい公園になればなるほど人が集まってくる。人も和んで優しくなってくる。だから、井口さんがやられたようなお花畑をつくっていく部分というのは、でも、それがずっと行き始めると、たしか女性の庭師講座も造園のプロの方が教えてくださっているんですよね。

【井口】　　プロが教えてくれるような女性庭師講座というのを始めたんですけれども、今では、最初のころの女性庭師講座をきっかけに勉強を初めて、造園施工管理技師１級ですとかを取った人たちがいまして、そういう人たちが先生になったり、そんな形でやっています。

【富永】　　先ほどちょっと休憩時間に富士植木の松本常務さんと話をしていましたら、「いずれ僕らの仕事はなくなるんだろうか」というふうに、こう言われたんですけど、「そういうことじゃないと思います」と。コミュニティが下支えをされて、豊かな花と緑がいっぱいになればなるほど、企業の力もまた必要とされ始めるんじゃないかなと思います。

【井口】　　そのとおりだと思います。

＜課題３：既存団地の管理と修理＞

【富永】　　じゃあ、次へ行きたいと思います。話の展開が早くて申しわけありません。時間の制約との闘いがありまして。

課題3：既存団地の管理と修理

- 1993年：　居住団地の管理開始
- 1999年：　住宅管理支援事業
　　住見隊（すみたい）開始
　　AZ松が谷団地の管理支援

京王電鉄グループとの連携を模索中

そんな中で、地域にお父さん、お母さんが出てくるようになりました。私が中心核であったために、奥様方と仲よくするとちょっと家庭不和の問題になるものですから、ご主人たちと仲よくするようになりました。それで、バブルはじけて、どんどんどんどん自分が住んでいる住宅の価格が下がっていくという中で、自分たちが住んでいる団地をきちっとメンテナンスをしなきゃいけないよねというような話から、プロの方々にＮＰＯの旗のもとに集まっていただいてというふうに思って、既存マンションや何かの管理、既存の戸建ての管理というのを始めて、一時期、３つの管理組合の管理を引き受けるところまで行ったんです。何せ住民の自立をさせようとするものですから、２つ自立してしまいまして、１団地に減っているんです。

それと、やはり企業の力がないと、ある一定領域以上はマンション管理みたいなものはできないという壁にもぶつかっているんですね。それで、今、きょうもおいでになっているんですけれども、京王電鉄さんのグループ、不動産屋さんから京王建設さんをお持ちなものですから、地域の安心・安全の企業の方にも協力をいただきながらやりたいなというふうに思うんですけれども、この辺になると片岡さんの出番かなと。

【片岡】　やっと回ってきました。確かに、ほんとうに専門家の方がやらなければいけないというか、しかできないことというのがたくさんあると思うんです。というのは、ほんとうに小さな修理であれば､皆さん日曜大工でご自宅でもされているでしょうけれども、やはりそれを越える一線というのは絶対あるわけで、例えばふすま１枚張りかえようと思っても、張りかえられなくはないんです、皆さん。でも、じゃあ、長くもつふすまの張りかえをしようと思ったら、そこでやっぱりちょっとした工夫があるのが皆さんおわかりにならない、できないということで、そこはやっぱりプロに頼まなければいけないという、その一線があるので、そういう意味ではやはりプロの方というのは絶対必要で、プロの方と一緒にやっていかないと私はいいものはできないと思っています。そういう意味で、私たちも手入れの講習会というのをやるんですけれども、その手入れの講習会というのは、自分たちはここまでできますけれども、それ以上はプロに頼んでくださいよという、その境目を皆さんにわかっていただくということでそういう講習会をします。ですから、やり方を覚えていただくためではないんです。そういう意図があってやろうと思っていますの

で、そういうことはやって、自分たちの物で手入れできるものは自分たちでやっていただいたらいいけれども、それを越える分はやはりプロの方にお願いしていただきたい。お願いするときには私たちが窓口になりますよという宣伝も兼ねてということをやっております。

【富永】　　ありがとうございます。

そういった部分も、自分の団地のことで恐縮ですけれども、団地の中で仲よししてきたものですから、去年から今年にかけて１０年をちょっと過ぎたので、大規模修繕というのをやったんですが、コミュニティがしっかりしていたので、１億を超えるような修繕費用を使ったんですけれども、とっても仲よく、みんなでかなり白熱した議論もあったんですけれども、何とか破綻しないでみんなで頑張って、この間、工事完了を迎えて、修繕委員会の中心メンバーはこれから秋のよき日に温泉旅行に１泊２日で行くというふうに言っております。この辺の楽しみを一方で持ちながら、もちろん工事業者はプロの工務店に頼んでやっているわけですから、そういう力を上手に引き出すためにも、コミュニティをベースに、「ちょっとプロ」たちの場みたいなものがあって、それで完全に本職の人たちが出てくる場みたいなものが乗っかってくると、いい仕事ができるのかなというふうに思いますね。

＜課題４：自由に住宅を創る＞

次に参りたいと思います。自分たち、いろんなことをやったんだということがよくわかるんですけれども、課題４です。ニュータウンと言われるようなところ、現代社会、日本もそうだと思うんですけれども、全部画一的な既製品のようなおうちをつくられて、それを自分たちは選んで買うだけと。何かこういう既製服を、自分なんかはオーダーメイドの服をよう買わないものですから、つるしを買いに行くわけですけど、何かそんなような感じがします。そういうのに抵抗してみたい人たちがいて、そういう昔にあったような、「あったらいいな　こんな住まいづくり」という話をしたんですが、ところが、お金も何もないものですから、なかなかできない。「僕らだけではできないね」というふうに言っていたら、このまちの大地主さんであります当時の都市公団さん、

課題4：自由に住宅を創る

- 2000年：「あったらいいな　こんな住まいづくり」の調査を都市公団から受託
  夢見隊（ゆめみたい）開始
- 2001年：「実施マニュアル作成」の調査を都市公団から受託
- 2004年：ヴィレッジ浄瑠璃14団地完成
- 2006年：国土交通省
  土地活用モデル大賞受賞（10月26日）
- 2007年：夢見隊2号、3号完成予定
  ミサワホーム・岡建工事・富士植木と協働

今、ＵＲ都市機構さんですけれども、スポンサーをしてくださって、調査仕事を発注してくださったんです。そのことによって、普通の調査ではなくて、かなり実践的な調査仕事をやる気でやりまして、場合によっては自分たちでほんとうに家建てちゃおうというぐらいの気合いでもってやったためになかなか苦労するわけですけれども、これがコーポラティブ住宅に発展するんです。吉田さん、さっきコーポラティブ住宅の話をされていましたけど、もう少しその辺を教えていただけるでしょうか。

【吉田】　昭和５４年の８月に、その当時の住宅公団が高蔵寺でこんなことをやりたいと。グループ分譲住宅。まだコーポラティブハウスという名前を私は知らなかったんですが、まず、グループ員を募集して、７４区画のそれぞれ区画を選びましょう、そして、それぞれ自分の思いで家をつくりましょうと。二戸一、２戸で１棟の住宅３７棟つくりました。ですから、それで私が公団さんともご縁があって建設組合の理事長をお受けしたのがこういうことの始まりです。これはさっきも申し上げたわけですが、それで１年半かかって、住宅公団さんの全面的なバックアップ、１年半の間、大きな部屋を２つ開放していただいて、自分たちで実際に壁紙を選んだり、屋根のかわらの色を自分たちで選んだり、だから隣同士で話し合う。例えばＡさんの家とＢさんの家、棟続きですから、同じかわらにしようというようなことも含めて、そういう形で７４戸が全部間取りが違うということです。

そうして２７年ほどたちますと、今度はそれがまた住みかえの一つのことになるわけですけれども、こんなケースもありました。主に３ＬＤＫないし４ＬＤＫぐらいのおうちを皆さん建てられたわけですが、とてもこんな大きな家は要らないということで、それを不動産屋さんに処分してマンションに移られたというようなケースがあります。これが私の住んでいる石尾苑という名前の住宅地ですが、これが、そこで住みかえの第１号のときに、私も将来こういうことも出てくるのかなと思ったことです。それで５４年の８月から５６年の３月までに、自分たちで家をつくるということの共同作業とまち並みをつくるということ、植木１本に至るまでみんなで相談をして、スペースをうまく共有したり、集会所のレイアウトを考えたりということで、自分の家づくりという一生で１回か２回しか体験できないこととあわせて、まちづくりという、これもそう簡単には体験できないことをやったというのがやっぱり大きな成果で、そこの中で、私は先ほど申した石尾台というところに住んでいますが、石尾台のコミュニティの核として、そこから少しずつ広めていったというのが私の活動の始まりです。

【富永】　なるほど。ということで、どういうふうに住宅公団さんとかまちの人たちが、人が集まることでいい情報交換ができるようになって、いろんなことができるようなきっかけもできたと。

赤井さんに伺ってみたいんですけれども、街角広場なんかやっていると、単純に、いやぁ、生活あれ困った、これ困ったということの中身というのは、やっぱり住宅問題が多いんですかね。それとも介護とかそういうふうな話が多いんでしょうか。

【赤井】　街角広場はほんとうに全般ですね。住みかえ、それから、施設へ行きたい、どんな施設がどこにあるだろうという話も出てきます。そうしたら、一言言えば、１０人が１０人、いろんな答えをくれます。どんなことでも、毎日、日常のこと、それから変な話、ほんとに家族のちょっと困ったこと、夫の困ったこと、奥さんの困ったこと、何でもその場で、あれ、不思議ですね、雰囲気で言えてしまうんですね。一言言えば、いろんなところから回答も来る。こういうふうにしたらいい、ああいうふうにしたらいいって。だから、よろず相談承り所みたいなこともやっています。

【富永】　なるほど。

【赤井】　私が答えを出すんじゃないですよ。

【富永】　わかっています。わかっているんですけど、結局、街角広場に集まることが何かアナログ的なサーバーのような、情報の通り道のような機能になっていて、そこで意図して何かしちゃいけないんだと思うんですね。だから、赤井さんのイメージというのは、僕から見ていると、私も一部そういうところがあると思っているんですけど、人間サーバーというふうに言っているんですね、僕は自分のことを。自分であんまり何か意図して決めようとするのではなくて、僕は素人なものですから、全方位に対して素人なものですから、プロたちのいろんな声というのをいかに取りまとめて、一つの方向へ、みんなの求めの方向に何となく――それがけんかに行っちゃいけないから、夫婦の別れ話とかそっちの方向へ行っちゃいけないから、何かそういうコントロール、少し良質な、ちょっと交通整理だけぐらいはされているんだろうと思うんですけど、そんなことが思うところです。そういう情報のインフラみたいなものができるようになってくるとこんなことも可能になって、最初のコーポラティブ住宅が２００４年、２年前に完成をいたしました。それがたまたま偶然なんですが、今日１０月２６日、国土交通省の土地活用モデル大賞を受賞しておりまして、夢見隊（ゆめみたい）チームリーダーの宇野さんは、先ほどまでここへ来ていたんですが、今、霞が関ビルのほうへ授賞式に行きましたので、ご報告をしておきたいと

思います。こんなことができるようになったのも、都市機構さんのサポートがあったおかげでここまで来れたかなというふうに思っています。

じゃあ、２号、３号、私はやめておけというふうに言ったんですけれども、宇野さんはどうしてもやりたいと。何せ１４世帯の方々が幸せそうに暮らしておられるものですから、それを見るとやりたいんだと。「僕らだけじゃもうできないから。あれは間違って成立したんだから」というふうに言ったんですけれども、どうしてもやりたいと。そうしたら、ホワイトナイトみたいな人が出てきまして、ミサワホームと岡建工事と富士植木さんと、みんなが「協力してあげるから、何とかやろうよ」というふうに言っていただけるような時代が来たということであります。

＜課題５：高速インターネットの利用＞

このまちの人たちはとってもインターネットが大好きな人たちが多くて、１９９９年、ちょうどＮＰＯ法人をつくるころに、高速インターネットの時代が来るんだ、ＡＤＳＬだとかケーブルテレビのラインを使ったようなインターネットの時代が来るんだと。動画が送れるんだという話があって、「自分たちのまちにも」という声が上がりまして、「ＮＰＯ法人でそれを何とかコーディネートしろ」という声も上がってきたことを勢いに、２０００年に「東京めたりっく通信」というベンチャー企業と提携をいたしまして、高支隊（こうしたい）、高度情報化支援事業というものを立ち上げて、ＡＤＳＬ、４カ月間で５００件目標を掲げて、５００件契約達成をやったんです。集合住宅のために、実際に開通するのは３５０ぐらいしか開通しなかったんですけれども、当時の技術では３５０ぐらいまでしか開通しませんでした。そのことが、今日のインターネットライブ中継なんかを拠点でできるような力を蓄えてきたことに通じたかなと。人間の持つ会話力みたいなものをぜひデジタルの世界でメーリングリストみたいなものでやっていただけるといいなという気がするんです。その辺、何かお使いですかね。赤井さん？

課題5：高速インターネットの利用
（民間企業との協働）
- 2000年：東京めたりっく通信と契約
  高度情報化支援事業
  高支隊（こうしたい）開始
- 2001年：ADSL契約申込 500件達成
- 2006年：インターネットライブ中継を実施中
  （自然館、多摩NPOセンター）

【赤井】　私のところはほんとアナログ生活ですので、街角広場はアナログですけれども、それをやっている私たちのところには井戸端ネットというのがあります。それから、街角も、全部メーリングリストでいろんな連絡はしております。ですから、あの中に来る

人はアナログなんですけれども、いろんな連絡とかそういうものはほとんどそういうデジタルでやっています。

【富永】　　僕の周りにもメールで打っても一切返事をよこさん連中がいっぱいおるんですね。でも、見ていないのかというと、見ているんですね。それで全然反応しないんですね。それで知らないのかなと思うと、知っているんですね。それで、都合が悪い話になると無視しているんですね。でも、今笑っていただいたんですけど、この距離感みたいなものがこのまちにちょうどいいみたいです。面と向かって話をし始め過ぎると、おっとーという。「何か手伝ってよ」って言われて、だめと言えないんだけど、「街角広場で今度こんなことをやるんだけど、お手伝いできる人」って言ったら、それが可能な人だけがハイハイ、ハイハイというふうに手を挙げればいい。それで、突然、「たまたまあいたから」なんて来てくれる人もいたりと思うんですよ。だから、無理やり押しつけないで済む「ちょっとだけボランティア」をぱっと引き出す関係のこの距離感というか、気楽さみたいなものもベースに必要なのかなというふうに思います。井口さんもそんなことを思われるでしょうか。無理してはできないので、何か。気楽さと距離感とか、ネットを使ってとか、何かその辺で。

【井口】　　そうですね。今、「１００本のクリスマスツリー」の準備の真っ最中なんです。これ、学生たちが中心になって担ってくれていまして、クリスマスの応援隊というのを筑波大学と筑波学院大学の学生たちが数十人でつくってくれています。それはネットでメーリングリストができていまして、「こういうことをやりたいんだけど」と言うと来てくれるというのが、ちょうどそんな感じかなと思います。学生ですと授業があったりしますので、こちらから電話をかけたりとかそういうのがやりにくいので、メールというのはとっても便利なものだなというふうに確かに感じています。

【富永】　　なるほど。今の時代にコミュニティといっても、単純にアナログでするだけじゃなくて、インターネットを使うということがとっても多用され始めている。きょう、残念ながら総務省の地域情報化を考えている人たちが来る予定で、来られなくなっちゃったんですけれども、後で速記録をホームページ上にアップしたいと思いますので、見ていただければと、思います。

http://npo-fusion.jp/

＜課題６：地域活動支援＞

そんなことをしていましたら、ＮＰＯをつくったのが早かったものですから、ＮＰＯのつくり方を教えてくださいとか、ＮＰＯの運営の仕方を教えてくださいとかというようなことが持ち込まれてくるんですが、フュージョン長池というのは、地域のコミュニティ活性化を目指して走っていましたので、ちょっと本来事業じゃないので苦慮していたんですね。そうしましたら、多摩市さんのほうで多摩ＮＰＯセンターの管理運営主体を公募しますというふうに言われたので、手を挙げてみたら採用していただいたものですから、多摩市さんとの共同事業が始まりました。スタートさせていただいて１年半ほどになります。多摩ＮＰＯセンターの業務を受託したのが２００５年の４月からで、現在継続中であります。多摩市内に約７０ぐらいのＮＰＯ法人があるようですが、多摩ニュータウン全体に１００ぐらいあるんじゃないかということで、全部いきなりできないんですけど、水曜日のたびに１団体づつ、１年５０週ぐらいありますので、四、五十件できたらいいけどなというような思いで、スタッフが今、ヒアリングをしてくれています。このアナログの出会いも含めてないと大きなネットワークにならないかなというふうに思いながらやらせていただいております。

課題6：地域活動支援
（多摩市との協働）
・2005年：多摩NPOセンターの業務を受託
・2006年：継続中
約100団体の現況をヒアリング中

＜課題７：住替え支援＞

課題7：住替え支援
・2006年：暮らしと住まい相談センター開設
（国土交通省・H&C財団・多摩市との協働）
福祉住宅の再整備
少子・高齢化に相応しい住宅開発
暮らしの支援サービスが必要
行政・企業・地域活動団体の協働が必要
（10月28、29日（京王感謝祭）で、特別住替え相談会を実施）

住みかえ支援をやってくださいというのがきょうのこの場につながってきたんですよという話をしたんですが、国土交通省さんの住宅局のほうからある方がおいでになって、多摩ニュータウンという、ニュータウンという名のつくところは国家プロジェクトで大きく関与したので、自分たちが一定の責任感を持ち続けなければいけないというふうに思っていますと。新たな時代に行くに当たって、霞が関からでは、空を見上げて、あっちの方向が多摩ニュータウンの方向なんだけどなということしかわからんのですと。ハードを開発するのであれば自分たちが主導的な立場をとればよかったけれども、今度は、

ソフトのまち育てみたいなものがどうなっていくかは、地域のＮＰＯのようなところを応援する、後ろで黒子になることで何か支援できることがあるように思うので、とりあえず住宅局なので住みかえだと、こうやって言われるわけですけど、「ちょっとその言葉を広目にとってもいいから」ということで言っていただいたので、ご容赦いただいて、暮らしと住まい相談センターという名前にいたしました。暮らすということの中に住まいが入ってくるものですから、そんなような思いでおります。

おそらく片岡さんのところも、住まいのハード的な面、メンテナンスだとかそういうことだけじゃなくて、先ほども何かソフトの暮らしの支援みたいなことも何か考えておられるようですけど、もう少し何か具体的にありましたら。

【片岡】　暮らしというよりも、住まいが暮らしの中心になりますから、ハードをさわっているうちにおつき合いが深まれば、当然、「いやぁ、買い物に行くのが遠くって」「坂道を上るのが大変で」「荷物が重くって」という話は出てくるだろうと。私たちは今もう出てきているという話ではないんですね。必ず出てくると、もう信じ切っております。そのあたりをこれからは、住まいのメンテナンス関係とかでおつき合いできた方について、例えば買い物を代行してあげる、もしくは、それこそ住まいの中でもお掃除の面であるとか、そういうこともやはりいずれ手をつけなければいけないというのは目に見えている話で、それはニュータウンの中で――これは多摩はどうか私はよくわからないんですけど、千里ではそのあたりをこまめにやるという団体はないですし、介護の関係の方々がボランティアで一生懸命やられている面はあるんですけれども、組織立ててやられていないですから、そういう話がどんどん出てくると。必ず出てくる。それを組織化するのはやっぱり私たちしかないだろうなというふうに思っているというのが今のところなんです。具体的にじゃあ、この事業をこんなふうにやりますよというビジネスモデルをここでお話しするほど、まだきちっとはできていませんけれども、そこまで手を広げてこそ、住まいの面でまで見られるんじゃないかなと。その人の暮らしのすべてである住宅を中心に住まい全体、暮らし全体、その人の生活全体を何がしかの形でお手伝いするということになっていくというふうに信じ切っております。

【富永】　僕らも同じようなことを思っておりまして、ですから、暮らしと住まい相談センターでいろんなご相談があるんですが、僕らは住みかえをさせるためにいるんじゃないんですよね。豊かに暮らし続けていただくために窓口として存在しているものですから、「住みかえたいんだけど」というふうに話が、先日も始めのころに１つ案件としてあった

んですが、お父さん、お母さん、若いお嬢さんがおいでになって、「お父さんが足が弱ってきておられるので、エレベーターがないので、エレベーターがあるところの建物に引っ越しさせたいんだけど」という話をされるんですね。でも、よく聞いていると１階にお住まいなんですね。それで、１階に５段ぐらいあるのが上がれないので、かわいそうだというお話で、そうしたら、何とか行政――都営住宅なものですから、「東京都のほうに話をしたりして、手すりをつけていただくというのを推進したらどうですか」って、「あ、そうですね」と。その次に、「じゃあ、僕らの仲間で便利屋さんをやっている孫の手サービスなんていうのもいるので、電球を取りかえるの大変だとかいろいろあるでしょうから、そういうのも紹介しましょう」と。だから、「そういう暮らすためのわがままメニューというか、そういうものを全部紹介しますから、引っ越ししないでもいいというメニューをつくりませんか」というふうに言ったんですね。そうしたら、それが結構喜んでいただけた。

もう１つその辺で、だから、まちの中でＮＰＯだとかもう既に存在している便利屋さんのようなところと連携するというのはありかなというふうに、今、思い始めているんですね。それと、ただ、やっぱり福祉だとかいろんなことが必要な方があるので、多摩市さんといろいろとお話、特に暮らしと住まい相談センターに関しては住宅課さんにお世話になっておりまして、今、月に２回ぐらい打ち合わせをしておりまして、そういうふうにすると、言葉として見えてきたのが暮らしの総合病院なんだなと。市役所というのは暮らしの総合病院で、僕らは風邪ぐらいしか治せない町医者だからという話をするんですが、ですから、総合病院につなぐときにも、どのお医者さんに言ったらいいのかということをつないであげるというのを良質にやるといいのかなというふうに思うんですが、片岡さんは、豊中や吹田のほうとか大阪府とか、そういう行政にも協力してもらってって何か考えておられますか。

【片岡】　行政の方々に協力してというのはちょっとおこがましいので、そこまで申し上げられないんですけれども、逆に、行政の方々が、いろいろヒアリングをさせていただいた結果、非常に困っていらっしゃるという姿が見えてきたんですね。それはなぜ困っているかといいますと、例えば住まいのことについて、吹田市の住宅の関係する部署に「これこれで困っているんだけど、どうしたらいいんですか」という相談を持ちかけたとしても、行政のほうでは「それに対して一切答えは出せないんだ」というお話をいただきます。「どうしてそれを答えてあげないんですか。答えてあげないと、その人たち、何の解決にもならないでしょう。せっかく電話してきたのに」と申し上げたら、「行政はやはり平等に

扱わなければいけないですから、特定のお話というのはできないんです」と。そうなると、やっぱり我々みたいなところが、お話を聞いたら、具体的に「じゃあ、ここに相談したら、こうしたら」という話ができるという、フリーハンドで動けるところが絶対に必要になってくる。それは行政の方々にしてみると、そういうところが出てくることを非常に楽しみにされているんです。ですから、大阪府さんでもそうだと思いますし、吹田市さんなんかの場合ですと、住宅政策を担当されているところに行きますと、「どんどんやってください」と。「私たちにできないことですから、それをかわってやってほしい」というふうにおっしゃいますので、そういう意味で、行政の方に協力をしていただくというよりは、行政のかわりに私たちが動くという、そういうスタンスで今おります。

【富永】　当然、片岡さんもわかっておられると思うんですけれども、行政の方々が持っておられる情報量だとか、例えば多摩市なら多摩市の中にある工務店リストみたいなものというのは、僕らより精度の高いものをきちっとお持ちなんですね。ところが、今言われるように、「どこか１社紹介してください」と言われたら、「いや、すいません、えこひいきになりますから、５０社全部紹介します」という話になるんですね。ところが、僕らＮＰＯは民間ですから、やっぱりこういう今日みたいな日にも出てきてくださる工務店とかおいでになるんですね。そうするとやっぱり、そういうところはちょっとおつき合いが近いものですから、何もそこでしようなんて思っているわけじゃないんですけど、ご紹介するときにやりやすいものですから、ちょっとこっちへと。やりやすい不動産にこっちへって。その中で良質な人間関係ができてきて、「あそこに行くと安心・安全な場所を紹介してもらえるよね」というふうになることが僕らの特徴であり、行政だけではできない部分の補完機能なのかもしれないし、それがあることで、個人にしてみて、ちょっとえこひいきのいい面が――あんまりそれが突っ込み始めて何か悪いえこひいきにつながらないようにしなきゃいけないということがあるんですけれども、そういう面、気をつけながらですけれども、やっていけば、いろいろとできるのかなというふうに思います。

ちょっとここで踏み込んで話をしておきますと、いろんな相談があるんですけれども、１つには、福祉住宅の再整備というのが必要なんだなと。全部５階建てまではエレベーターなしで来たものですから、結構速いスピードで建てかえなりをしなきゃいけないんでしょうと。でも、そのときに行政は金がないですから、おそらく、ＵＲさんの賃貸やってください、何とか改築してくださいとか、建て直してくださいとかって順番待ちというふうに言われるに決まっているので、何かやはり地元の良質な民間企業のようなところとのタ

イアップができて、ＰＦＩみたいな手法を使ったりして、何かいい形で団地再生みたいなものもどんどん推進できないとちょっと困るかなということが見えてきております。

こういう相談が、福祉住宅、生活もつらいし、家賃高くなるところは引っ越しできないのという話があります。それから、少子・高齢化にふさわしい住宅開発なんですが、どっちもあるんですね。先ほど片岡さんの話を聞いていても、住みかえだと。吉田さんの話を聞いていても、住みかえだと。きょうおいでになっている京王電鉄さんが「移住・住みかえ支援機構」という、国交省が今年つくったんですけれども、そこが間に入って借り上げて、京王電鉄さんのリスクを、空き部屋になったりするときのリスクを軽減しましょうという組織をつくってくれた。僕らがご紹介をしたんですけれども、そうしたら、見事、今年度１０月から来年３月までのテスト事業に手を挙げてくださって、採用されることになりました。これが一つの参考事例として今後動くかなと思っています。詳しくは、今回の資料ファイルの多摩ニュータウンの項に、１０月２２日（日曜日）に日経に載った記事が入っております。詳しくはホームページ等々を含めて見ていただけると参考になるかなと思います。

それからもう１つ、今言うような暮らしの支援策、住宅のものということだけじゃなくて、暮らしのサービスみたいなものが必要になる。そういうことを考えると、やはり総括的な、包括的なみんなの協働というか、助け合いみたいなことが人と人との助け合いだけじゃなくて、行政・企業・地域活動団体、さまざまに育っていかないとつらいのかなとふうに思います。

そんな中で１つご紹介します。１０月２８日・２９日の土曜・日曜に、京王電鉄さんが沿線住民の方々に感謝をするお祭りというのをなさいます。そこで、このホテルのフロアが全面的に開放されるそうなんですが、１日で５，０００人の子供たちが遊びに来てくれるらしいんです。そこで、３階のところに廊下がちょっと広目にあいておりますので、特別住みかえ相談会を京王電鉄さんのグループ不動産さん、建設のほうでリフォーム相談とかというような形で、それとまちの工務店さんにも手伝っていただいたり、夢見隊にも手伝ってもらって、私どものほうで応援をいただいて自主事業として特別相談会をやろうかなというふうに、今、計画して進んでおります。地元の企業ともやはり連携が必要な時代が来始めているように思っております。

＜課題８：暮らしの支援＞

次に参ります。こんなことを思うと、改めて暮らしの支援事業というふうに、私ども、NPOフュージョン長池もNPOフュージョンも何を目的に事業をされておられますかといったら、一言で暮らしの支援事業というふうに言ってまいりました。昔は衣食住というふうに言ってきたわけですけど、現代的には衣はかなり満足されておりますので、ちょっと外させていただいて、医療を含む健康であるためのサービス、食べること、それから住まうこと、それから移動すること。動けなくなると人間関係がなくなったりしてストレスになるようですので、吉田さんの説明にもありました、バスがいいですね。あれをもうちょっとお話を聞きたかったんですが、すいません、時間がなくなってきちゃったので、あと立食の懇談会の席にでもご興味の方は聞いていただけたらというふうに思います。

課題8：暮らしの支援

- 健康（医療を含む）であるためのサービス
- 食べることのサービス
- 住まうことのサービス
- 移動することのサービス

- 情報システムで支援（上記4つ）するサービス

そして、そういうものをサポートする意味で、情報サービスシステムみたいなものがもう１つインフラとしてさらなものが必要なんじゃないかなと。そういうことを考えると、今度の情報サービスというのは、ハードよりもソフト、もうこのまち、光ファイバーはいつでも堪能できる、ハード的には堪能できる設備ができておりますので、日本全国ほとんど都市部ではそうだというふうに思います。だから、ソフトの部分で今思うのは、富永だけにとって心地いいホームページみたいなものがあればいいのであって、Ａさん、Ｂさん、Ｃさん、人の数ほど豊かに感じられるようなサービスメニューが飛んでくるようなホームページ、パーソナル・ポータルサイトの時代、地域のポータルサイトを突き抜けて個人のためのポータルサイトの時代が来ようとしているのではないかなと。これ、総務省の関東ＩＣＴ推進ＮＰＯ連絡協議会でその方向性で協議をさせていただいております。私ども副代表をやらせていただいていますので、その辺がまたいろんな形で世に見えてくることがあるかなと思いますので、一言申し添えておきます。

＜課題９：豊かに暮らす＞

課題9:豊かに暮らす

行政・企業・住民の協働

経済界の恩師
山路敬三氏（元日本テトラパック会長）

豊かな暮らしを実現するところに
「暮らしを実感するビジネスチャンス」あり！！

もうすぐおしまいでございますが、課題９です。そんなことの中で、総合的にわがままいっぱいに、この豊かな時代に関してはわがままいっぱいに豊かに暮らすということが必要なのかなと。そのためには、人が主役の時代、組織は応援する側に回る時代、人の数ほど輝きがあってもいいというふうに思っています。ですから、きょうは、こうやって５人の発表者が発表するとそれぞれに個性がある。私の場合にはまだ５４歳で現役のビジネスマンでありますので、セールスだとかマーケティングをやってきた人間なものですから、こんなふうにいろんなサービスメニューを商品開発するように組み立てるということを、ある種、得意わざとしているわけですね。ですから、こんなふうになる。で、自分で１個もできないものですから、課題の１個１個に責任主体者を見つけてきては、「あんたがやるなら僕が応援する」というパターンでずっとやってまいりましたので、人の数ほど支援事業が生まれるというふうに言ってまいりました。支援事業をやるときに自分で全部やろうとすると、それも一つのやり方なんですけれども、なかなか大変でありますので、コーディネーターに徹してみるというのも一つのおもしろさかなというふうに個人的には思っています。そんな中で、行政・企業・住民の協働という、とにかく助け合ってみんなで幸せになろうよと。あのまちで暮らしてよかったねというふうに言えるようにやれればいいのかなと。

ここに一言、私の恩師であります山路敬三さんという方は、キヤノンの副会長までされて、私の前職でもあります日本テトラパックという会社の会長もされて、お亡くなりになったんですけれども、その方から私に遺されたこれが遺言であります。ちょっとわかりづらいので言葉を変えちゃったんですけど、「クオリティ・オブ・ライフの時代にビジネスチャンスあり」というふうに、山路会長は外資系なものですから英語で言われて、ちょっと意味不明になるので、意を解して、暮らしを実感するビジネスチャンスがあるよと。

それは、ＮＰＯだとか住民のほうの側から発案されて出てくるものを企業が応援したりするところに、新たな暮らしを実感するビジネスチャンスが見えてくるのではないですかという、このことをよく考えながら持続可能にするんですよと。ボランティアだ、ボランティアだって、それはいいけれども、腹が減って第１世代が倒れたらそれでおしまいという

活動では、社会的責任を果たしていくことができませんよ、だから、何とか経済的自立を目指してきちっと経済活動に行くところまでやるんですよ、第２世代、第３世代、１００年の時間を超えられるようにやるんですよというふうに教えていただいたことを改めてここに付記させていただきました。そんなことを思いながら活動しております。

時間が来まして、傍聴席からの質問を受ける時間がなくなっちゃったんですけど、ご容赦ください。ありがとうございました。（拍手）

【妻野】　　縁卓会議の報告者の方々、１時半から今の時間まで大変熱弁を振るっていただきました。私も傍聴をして、多々得るものがありました。予定では、傍聴者の方から意見も伺ったり、質疑応答をやろうと思っていましたけれども、この後にやります立食パーティーの席でぜひ交わしていただきたいというふうに思います。

富永さん、１つ提案でございますが、きょうの会議は第１回目でありますけれども、あとはどうするんですか。２回目とか３回目は考えていらっしゃるんですか。

【富永】　　千里の片岡さんに根回しはしてありまして、２回目をちょっとお願いしたいんですけれども、いかがでしょう。

【片岡】　　本来、千里のほうが先だったので、１回目も千里でやるべきだったなと後悔した次第ですので、２回目は何とか千里で開催させていただきたいと思います。（拍手）

ありがとうございます。その節はまた、皆さんご支援・ご協力をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【妻野】　　提案がありました。千里の片岡さん、赤井さん、またお帰りになって、来年になるか、再来年になるかわかりませんけれども、ひとつよろしくご検討ください。

私共も出来る限りの応援をさせて貰います。

立食パーティに移りますが、二、三分、ご報告をします。

きょう冒頭で申し上げました、特別傍聴されている方三十数名の方から、１人１万円ずついただきました。大変ありがとうございました。会の途中で、新たにもう１万円出しましょうという方もいらっしゃいまして、総額は三十数万円、ありがたくいただきました。簡単に収支のご報告をしますと、会議の報告者、千里、高蔵寺、つくばニュータウンからおいでくださった方々に旅費で８万２，０００円ほど、宿泊費で４万６，０００円ほど、それから、この会場費、立食パーティーも含めまして３２、３万円がかかりました。ざっと

計算しますと、私ども予定をしておりました費用をつけ加えまして、収支とんとんかなと思います。おかげさまで大変ありがとうございました。改めて感謝申し上げます。（拍手）

それでは、間もなく立食パーティに移りますけど、最後に、縁卓会議の報告者の皆さんに、改めて拍手をよろしくお願いします。

（　拍　　手　）

【妻野】　　これをもって第１回「ニュータウン人・縁卓会議」を終わります。

ありがとうございました。（拍手）

――　了　――

１０月２７日（縁卓会議終了の翌日）多摩ニュータウン見学顛末記

１０月２７日（金)、朝９時に「京王プラザホテル多摩」の玄関前に、前日の縁卓会議の報告者達は集合した。そこに、富永は「運転手兼ガイド」として、せいがの森保育園から無料で借りたワゴン車に乗って現れた。この地域活動家の一団は、行政や都市機構が主宰する「多摩ニュータウン見学会」とは、すぐに異なる反応を始めた。富永さん「このワゴン車どうしたの？」、「このワゴン車は、近くの保育園から無料で借りてきたよ」と答えると、「たいしたものですね！レンタカー借りたらお金が大変だものね！」、「日頃の付き合いがないと、こういう時に簡単には貸してもらえないよ！」と笑い声がはずむ！！

次に、前日（２６日）の縁卓会議の様子が「毎日新聞」に掲載されていたことが話題に、マスコミがすぐに反応して、記事にしてくれることもNPO人気のお陰と話題はさらに盛り上がる。

多摩センターから多摩ニュータウンの南側を西へ走り始めて、最初に立ち寄った場所は、八王子市長池公園自然館である。２００６年４月から特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン長池（特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョンの産みの親）が代表団体となって「指定管理者：フュージョン長池公園」を構成して受託し、２０ｈａの自然保全型公園を全て管理させてもらっている。春からの努力が実って大変に美しく管理されている公園に評価を頂いた。

その次は、多摩ニュータウンの西のはずれである「多摩美術大学」を車窓から見学。さらに、今度は多摩ニュータウンの北側を走って東へ進路をとり、多摩ニュータウン最後の開発用地である「１９住区」を見てさらに東へ、西永山中学校の廃校跡にできた西永山複合施設の中に、特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョンが管理・運営させて頂いている多摩市の「多摩NPOセンター」の場所を確認して、いよいよ「諏訪・永山地区」へ、ここへ来ると千里や高蔵寺の方々から「自分達のまちへ帰ってきたみたい」と反応があった。

最後は、多摩ニュータウンの東側で、現在開発中の若葉台地区へ着くと、「わあー！別世

界だ！多摩ニュータウンは広い上に、今尚開発中の場所があるんだね！」と盛り上がる。

再び、多摩センターまで戻り「暮らしと住まい相談センター」で美味しい昼食弁当を頂きながら、これから来年の千里訪問までをどうするかが話題になった。結論は、高蔵寺や筑波でも春以降に「タウンウオッチング」を催すことに決まった。「やっぱり今日みたいに、地域住民に案内してもらうと良く分かる！」というのが結論であった。

記：特定非営利活動法人　エヌピーオー・フュージョン

理事長　富永　一夫

第1回「ニュータウン人・縁卓会議」配布資料一覧

1 第1回「ニュータウン人・縁卓会議」次第	A4-1P
2 主催者からのご挨拶	A4-1P
3 第1回「ニュータウン人・縁卓会議」出席者と活動の紹介	A4-1P
4 第1回「ニュータウン人・縁卓会議」参加者名簿	A4-1P
（千里ニュータウン・大阪府）	
5 千里ニュータウンの戸建住宅居住者に対する生活支援	A4-5P
6 大阪府事業委託 すまいを助けたい！	A4-2P三つ折
7 夢をくれたまち。千里ニュータウン展 ひと・まち・くらし	A5-14P
8 「ひがしまち街角広場」のこれまでとこれから	A4-3P
9 2006.10.08ひがしまち街角広場5周年記念	A4-10P
（高蔵寺ニュータウン・愛知県）	
10 高蔵寺ニュー（ライフ）タウンの概要、活動報告とデータ・記録集	A4-9P
11 参考図表高蔵寺ニュータウン	A4-9P
12 お互いさま 石尾台地区社会福祉協議会広報 第90号	A4-4P
13 讀賣新聞記事 どうなる高蔵寺ニュータウンどうする 「千里」「多摩」と連携 2006年9月13日	A4-1P
（筑波研究学園都市・茨城県）	
14 特定非営利活動法人つくばアーバンガーデニング	A4-8P
15 花守りさん11月号 No.77	A4-4P
16 TUGファイル NO.10 2006年3月15日	A4-8P
17 つくばスタイルシンポジウム日本初！つくば発「新田園都市・なかこん」のまちづくり	A4-4P
（多摩ニュータウン・東京都）	
18 特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン資料 課題1；自分の老後の対策から課題9：行政・企業・住民の協働	A4-4P
19 ヴィレッジ浄瑠璃14(東京都八王子市）	A4-1P
20 NPO FUSION 夢見隊	A4-2P三つ折
21 暮らしと住まい相談センター	A4-2P三つ折
22 日本経済新聞記事 京王電鉄 沿線で住み替え仲介 2006年10月22日	A4－1P
視察参考資料ーUR都市機構提供	
23 TAMA NEW TOWN SINCE1965 ー街に、ルネッサンスーUR都市機構	A4-18P

第１回「ニュータウン人・縁卓会議」活動報告者と団体の紹介

＊千里ニュータウン

特定非営利活動法人　千里すまいを助けたい！　　代表理事　片岡　誠
＜連絡先＞〒565-0813 大阪府吹田市千里丘下25番28号　スペースプランニング内
TEL 06-6875-7459　FAX06-6875-7461　E-mail kattan@be.mbn.or.jp
URL http://www.voluntary.jp/sumai/
千里ニュータウンの高齢住民の住み替えや、住居の管理などの支援事業を始めて2年。2006年9月からは大阪府からの受託事業として移動相談会を実施。相談は不動産コンサルタント、建築士などの専門スッタフが対応。

ひがしまち街角広場運営委員会　　委員長　赤井　直
＜連絡先＞〒560-0082 大阪府豊中市新千里東町3-6-111
TEL 090-8169-6592　E-mail suna0-ak@mx5.canvas.ne.jp
ニュータウンの近隣センターに談話室を開設。地域コミュニティの拠点として、地域情報の交換の場、イベントや定例行事の場、或いは、お年寄りの駆け込み寺の場として地域の生活総合センターとして活動。

＊高蔵寺ニュータウン

春日井市コミュニティ推進連絡協議会　　会長　吉田光雄
＜連絡先＞〒487-0006 愛知県春日井市石尾台6丁目1-29
TEL・FAX 0568-91-3747　携帯 090-9027-1912
新しいふるさとづくりをモットーに、ニュータウンの各地区にコミュニティ、社会福祉協議会などの組織化と共にネットワークを構築、春日井市の行政と連動しながら福祉、防犯(地域安全)、ゴミ減量・リサイクルなど多岐にわたる活動。

＊筑波研究学園都市

特定非営利活動法人　つくばアーバンガーデニング　　事務局長　井口百合香
＜連絡先＞〒305-0821 茨城県つくば市春日3-10-11 メゾードつくばⅠ-103
TEL/ FAX 029-858-0874　E-mail tug@msf.biglobe.ne.jp
URL http://www5e.biglobe.ne.jp/~tug/
ニュータウンの無機質な街に人のぬくもりを育てようと、ガーデニング運動に取り組んで6年、女性庭師の養成講座の開設を皮切りに街の公園、ビルの庭、100本のクリスマスツリー運動などに取り組む。

＊多摩ニュータウン

特定非営利活動法人　エヌピーオー・フュージョン　　理事長　富永一夫
＜連絡先＞〒206-0033 東京都多摩市落合1-43 京王プラザホテル多摩304
「暮らしと住まい相談センター」内
TEL 042-401-6771　FAX 042-338-7137　E-mail ks@npo-fusion.jp
URL http://npo-fusion.jp/ks/
地域の暮らしの支援を目的に生まれた事業型NPO。これまで、行政からの受託事業や、住まいに関する事業に挑戦、2006年4月からは、自主事業として「暮らしと住まい相談センター」を開設し、ニュータウン問題に取り組む。

第１回　「ニュータウン人・縁卓会議」写真集

第１回「ニュータウン人・縁卓会議」収支実績報告

収入		支出	
支援金（特別傍聴費を含む）（36名）	360,000	京王ﾌﾟﾗｻﾞﾎﾃﾙ（会議室使用料）	140,000
特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン負担	291,416	（懇親会費）	93,750
		（サービス料）	21,375
		（消費税）	12,756
		（宿泊費4名分）	46,200
		㈱大和速記情報センター	55,125
		交通費　（報告者4名分）	82,130
		交通費　（ スタッフ ）	2,100
		資料代 （消耗品、印刷代含む）	43,598
		会議費	14,162
		ﾒｰﾙ便代	8,220
		報告書印刷費（文芸印刷）	132,000
	651,416		651,416

上記の支援金収入は、特別傍聴者29名で29万円、無償の支援者1名で1万円、支援金のみの参加者6名で6万円を合計した36万円でした。特に当初は出席予定者であったY氏は、10月29日(日)に1万円を持参してくださいました。新しい時代を求める志の高い支援金で会議が開催できましたことを誇りに想います。こうした多くの方々の大声援に応えるためにも、さらに実現力を養ってまいります。

特定非営利活動法人 エヌピーオー・フュージョンン
理事長　富永一夫

第１回ニュータウン人・縁卓会議報告書　　平成19年1月発行

編集・発行　特定非営利活動法人エヌピーオー・フュージョン
NPO フュージョン研究所
連　絡　先　住所　〒206-0033 東京都多摩市落合1-43
京王プラザホテル多摩304
「暮らしと住まい相談センター」内
TEL：042-401-6771　　FAX：042-338-7137
E-mail：ks@npo-fusion.jp　URL：http://npo-fusion.jp/ks/

印　　刷　　文芸印刷
印刷実費　500円